大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

西遊補訳注（第一回～第四回）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大平, 桂一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004389

西遊補訳注（第一回～第四回）

大　平　桂　一

前書き

2003年に荒井健先生と『鏡の国の孫悟空』（平凡社東洋文庫）を出版してからすでに８年たった。その後もう少し詳しい注釈が欲しいという要望が筆者によせられたため、注釈を増補し、講談調の「ですます」文体を、近代小説風の「である」文体にあらためたのが、今回の西遊補訳注である。本来雑誌『飈風』に掲載した筆者の西遊補論である「西遊補私論」上下、と董説の夢日記の訳注である「昭陽夢史訳注」とあわせて出版の予定であったが頓挫し、今回西遊補訳注の一部分だけを『人文学論集』に載せていただくことになった。

西遊補の作者董説（1620－1686）は明末清初に生きた人である。字は若雨、浙江省呉興南潯鎮の人。父の董斯張は地方の著述家で、十数種類の著書がある。董説も多才な人で、易学、音楽学、仏教学、歴史学など多方面にわたる業績がある。その生涯は趙紅娟氏の『明遺民董説研究』（上海古籍出版社2006年刊）に詳しい。

西遊補は彼が二十歳の時に書いた作品である。既成の西遊記の枠組みこそ借りているが、中国文学史上まれに見る（唯一と言っていいかもしれない）純粋な幻想小説であり、近年注目を集めている。西遊記の火焔山の条で、孫悟空は鯖魚精という妖怪の罠にはまり、無数の鏡からなる万鏡楼を媒介として、閉鎖的であるが広大無辺な世界に迷い込む。古人世界、未来世界などを経て、最後は西遊記の時空に帰還する。

今回の訳注では、崇禎刊本の影印本に荒井健先生が注記された劉半農校点本との異同に、汪原放校本との異同を加えて校勘記を作成し、それを参考にしつつ、だいたい崇禎刊本に従って翻訳した。まだまだ難解な個所も多いので（特に序文、第一回で悟空が読み上げる送冤文など）、読者の皆さんの教示・訂正を切に希望する。また最近李前程氏による『西遊補校注』（昆崙出版社2011年１月刊）が出版された。収められた崇禎本の挿絵はおそらくこれまでに出版されたものの中で、最も美しいものであろう。なお李前程氏の著書から補わせてもらった注釈には「＊」を付しておいた。

序

ある人は言う、三界[1]を出れば、情の根源は尽きるし、声聞[2]と縁覚[3]を離れれば妄想は空となる。また三界を出たところで、三界を超越することはないし、声聞と縁覚を離れても、声聞と縁覚を超越することはできない、と言う人もいる。一念が執着すると、虚妄が生ずる。虚妄は偏りを生み、偏りは魔を生み、魔は魑魅魍魎を生む。十倍の正覚を持った人でも、幻に身をまかせる。さらにそれが極まると、蔓延して別の情感が具わり、別人の身体に転じ、別の世界に転ずる、これが指を弾く一瞬の間に生ずるのである。これらは不完全な修行の結果起るもので、今も昔も同じ嘆きが繰り返される。

ある人は言う、鏡に光を借り、光に鏡を借りる。この光が常に我が体を照らし、時々刻々自らを省みて怠ることがないように。光も影も無く、根源に帰るすべもなければ、やはり歎くべきのみである。

西遊記を補った意図はどこにあるのか？

作者は「三たび芭蕉扇を調(うば)う」の後、火焔が鎮まったところで、あれこれ言葉を費やして、情の魔物が団結して様々な姿に変化し、悟空を夢の世界に迷わせ、一眠りの間に三千世界を幻出する様子を描き出している。

孫悟空が牡丹の花の下で一群の男女を叩き殺し、春の野原から突如新唐に入り、「驪山図」の話を聞いて「駆山鐸」を借用しようと思う場面[4]は、芭蕉扇の影がまだ消えていないようである。これは『周礼』占夢にいう「思夢」にあたる。

青青世界に落ち込むや、必然的に万鏡楼に到達したが[5]、それはすべて迷妄である。空中で人々が足踏みをし、天を開鑿していたのは[6]、すべて陳玄奘が殺青大將軍になったこと[7]に対する驚きの念から生じた幻影である。これは『周礼』占夢にいう「噩夢」にあたる。

1　三界　衆生の輪廻を構成する欲界、色界、無色界の三つを指す。寒山詩（213）に、「畏るべし三界の輪、念念　未だ曾て息まず」とある。

2　聲聞　仏の教えである四諦を観察することよって阿羅漢となった人を指す。『大乗義章』巻十七に、「四諦を觀察して道を得たる者、悉な聲聞と名づく。」とある。

3　縁覚　十二因縁を観察して悟りを得た人を指す。唐の呂岩の「敲爻歌」に、「聲聞　緣覺　氷のごとく消散す、外道　修羅　項を縮めて驚く」とある。

4　『補』第一回～第二回。

5　『補』第四回

6　『補』第三回。

7　『補』第三回。

秦の始皇帝に会おうとして、西楚の覇王に出会い、古人鏡に入って始皇帝を探すうちに、未来世界に入り込んだ[8]。宋の丞相秦檜の案件を裁く場面[9]はまさに快刀乱麻で、数百年来歴史を覆っていた不平不満の気を解消した。『周礼』占夢にいう「正夢」にあたる。

葛藟宮で苦難に遭い[10]、愁峰頂で気晴らしをした[11]。芝居[12]、語り物[13]など悟空が経験したことは、すべて剣呑なことばかり、「相手が大波白波じゃ、力をかけようにも、かけるところがない」というものだ。『周礼』占夢にいう「惧夢」にあたる。

大昔から、情の根源にとって、「色」の一字が最大の難敵である。虞美人、西施、糸糸、緑珠、翠縄娘、蘋香たちは、みな独り身の女性たちで、愛想よく、美しく親しみやすく、艶な言葉づかいが活き活きとして、おのずから本性が現れている。『周礼』占夢にいう「喜夢」に近いのではないか。

波羅蜜王が悟空を父だと話す場面[14]まで来ると、星稀に月朗らかになり[15]、壮大なスケールを誇った夢ももうすぐお開きということになる。五色の旗が乱れ、魔界を出る。『周礼』占夢にいう「寤夢」にあたる。

これまで六夢を概観してきたが、以下に過去現在未来の三世について語り尽くしてきた。仏となり、魔物となり、仙人となり、凡俗となり、魑魅魍魎となる。それぞれが作り出した因縁は、皆原初以来のもので、輪廻を受けず、劫運を受けなかったとされる者も、已に輪廻、劫運を受けてきたのだ。それを自分が受けようが、他人が受けようが、何の区別があろうか。

心の外の心、鏡の中の鏡、電光石火どころか、あっという間に尽きてしまう。十六回の中身を見ると、悟空は俗世の煩悩にとらわれ、指揮官たる心は寄る辺なく彷徨っている。一枚の葉っぱがフワフワ水面を漂っているのに、誰が水先案内をしてくれるのだろう。

情熱が覚めてから情熱を求め、夢から覚めてから夢を求めても、手に入れようがない。この西遊補を読む人は、火焔の中で一服の清涼を得られ、冷(ひ)いやりして気持がよろしかろう。

8　『補』第五回～第七回。
9　『補』第八回～第十回。
10　『補』第十回。
11　『補』第十一回。
12　『補』第十三回。
13　『補』第十二回。
14　『補』第十五回。
15　曹操の短歌行に、「月明らかに星稀に、烏鵲　南に飛ぶ」とあるのを踏まえる。

辛巳［崇禎十四年西暦1641年］の中秋、嶷如居士[16]が虎丘[17]千頃雲[18]にてしるす。

16　誰であるかは不明である。博雅の示教を乞う。

17　蘇州にある景勝地。

18　＊千頃雲は虎丘の名勝である。袁宏道の「虎丘記」に当地の中秋の情景が描かれている。

西遊補答問

問　『西遊補』は欠けてもいないのになぜ補うのか？

答　『西遊記補』は火焔山芭蕉扇[1]の物語の後、心を洗い塔を掃く話[2]の前に置かれている。斉天大聖（悟空）は、計略を用いて芭蕉扇を奪い、火焔山を冷やそうとしたのだが、ただ単にそれを力で抑えつけようとしただけだった。四万八千年[3]という歳月は、すべて情の根が凝固してできたものだ。偉大な真理を悟るためには、必ずやまず情の根が空であると看破せねばならないし、情の根が空だと看破するためには、まず情の内側に入りこまねばならない。情の内側に入りこめば、この世界の情の根が虚無だと見極めることができるし、そうした後で、情の外側へ出て真理の実体を見極めることができるのだ。『西遊補』は情の妖怪の物語であり、情の妖怪とは青魚の精である。

問　『西遊記』の旧本では、妖怪が許多（あまた）登場するが、みな三蔵の肉を切り裂き、料理して食いたい、という欲望に駆られているにすぎない。ところがあなたの『西遊補』には、青魚が斉天大聖をだます話しか出てこないのはなぜか？

答　『孟子』に、「学問の道は他無し、其の放心（うしないしこころ）を求むるのみ」[4]とあるがこれがあなたの問いに対する答えだ。

問　古本の『西遊記』では、必ず最初に「何々の妖怪」と正体を明かしているのに、『西遊補』の情の妖怪は、正体が先に明かされていないのはなぜか？

答　それこそ私が『西遊記』を補ったキーポイントだ。情が人をたぶらかす際には、何の徴候もなく、知らず知らずのうちに、或いは悲惨な状況から、或いは快楽から、或いは気持ちの動揺から、あるいは見聞したものをきっかけに魔境に入ってしまう。魔境には、留まることもできず、変えることもできず、放っておくこともできない。一旦入ったら最後絶対出られない。情が魔だと知ることが脱出への契機となる。故に斉天大聖が鯖魚の腹の中にいた時には、それが鯖魚とは気付かず、鯖魚の外に飛び出してから、その正体を知ったのである。さらに、鯖魚から飛び出すまで正体に気付かなかった者、飛び出すとあっという間に鯖魚を殺した者、どちらも斉天大聖である。た

1　『記』第五十九回～六十一回。

2　『記』第六十二回。

3　李白の「蜀道難」に「爾来　四萬八千歳」とあり、清の王琦注に引く劉逵の「三都賦注」に、「揚雄の蜀王本紀に曰く、蜀王の先、名は蠶叢、柏灌、魚鳧、蒲澤、開明という。是の時人民は椎髻に嚆言、文字を曉らず、未だ禮樂有らず。開明從（よ）り上りて蠶叢に至る、三萬四千歳を積む」とある。しかしこれでは、四萬八千歳の起源はわからない。

4　『孟子』告子上。

ぶらかされていた人と悟った人の二人が存在するわけではないのだ。

問　古人世界は過去の話で、未来世界は未来の話だ。唐代初頭という時代設定のはずなのに、いかにして宋の宰相秦檜の魂魄を裁けたのか。

答　『西遊補』は情がもたらした夢である。例えば正月三日の時点で、三月三日に他人と喧嘩して手足に怪我をする夢を見て、三月三日になって、実際に喧嘩が起り、夢で見たことと完全に一致したとする。そもそも正月三日は三月三日ではない。だのにその事件を夢で見、現実に目で見たわけは、心がありとあらゆる時空に到達できるからなのだ。心がありとあらゆる時空に到達できるからこそ、心を放(うしな)ってはならないのだ[5]。

問　斉天大聖は古人世界で虞美人となった際[6]、なぜあれほど妖艶だったのか？未来世界で閻魔大王となった際[7]、なぜあれほど威厳があったのか。

答　心が未来世界に入るのは非常に危険なことだ。精神を奮い立たせないと、必ず一敗地に塗れる結果となる。六賊を殺した[8]のは邪念を取り除いたのであったし、秦檜を処刑した[9]のは進むべき方向を定めたのであったし、岳武穆（飛）を師父と仰いだ[10]のは、正道に復帰したのであった。これが大聖が情の妖怪から脱出できた道筋である。

問　斉天大聖は青青世界で三蔵の將軍姿を見るが、それはなぜか？

答　論ずるまでもない。「殺青大将軍長老将軍」の九文字を見ればわかる[11]。

問　第十三回[12]の「関雎殿にて唐僧(さんぞう)涙を堕とし、琵琶を撥(ひ)きて季女弾詞す」にはたいへん悲愴な趣があるが、なぜか？

答　この世の情の根は、「悲」一字に他ならぬからだ。

問　斉天大聖に突如として妻子ができたのはなぜか？

答　夢想によってなにもかもあべこべになってしまったのだ。

問　斉天大聖が情魔から脱出する時、五色の旗印が乱舞する[13]のはなぜか？

5　上記の『孟子』告子上の言葉を意識しているのは言うまでもない。

6　『補』第五回。

7　『補』第八回。

8　『補』第八回。

9　秦檜を処刑しては生き返らせて拷問したのは『補』第九回で、最終的に処刑したのは第十回である。

10　『補』第九回。

11　大将軍と将軍を取り去ると、「殺青長老」（青と情は同音なので、殺情長老＝情を殺す和尚）という暗号になっている。

12　実は『補』第十二回。『補』が最初に成った際には目録は十五回からなっており、西遊補答問も十五回を前提に書かれている。最後に現在の第十一回が補われたが、目録と西遊補答問はそのままになった。

13　『補』第十五回。

答　『清浄経』に「乱極まりて本に返り、情極まりて性見（ほんしょうあら）わる」[14]とあるのがその答えだ。

問　斉天大聖が牡丹に遭遇すると、ただちに情魔に入り込み[15]、奔塁先鋒になるとすぐに情魔から脱出できたのは[16]、なぜか？

答　情魔を斬るには一刀両断でなければならないからだ。

問　天は掘削できるのか？

答　これぞ作者の工夫というものだ。斉天大聖が鑿天の人々に遭遇しなければ、決して情魔には入り込まなかったであろう。

問　古本の『西遊記』では、すべての妖怪が牛の首じゃなければ虎の頭、山犬の声でなきゃ狼の目付きといった形相だったのに、『西遊補』第十五回[17]で描写している鯖魚の容姿は婉孌（しとやかにしてうつくしく）で近人（したしみやすい）[18]なのはなぜか？

答　「婉孌近人」の四文字こそ、史上最強の妖怪の正体なのだ。

静嘯斎主人[19]しるす

14　不詳。

15　『補』第一回。

16　『補』第十五回～十六回。

17　崇禎刊本の『西遊補』の目録は、実は十五回しかなく、第十一回の「節卦宮に帳目を看、愁峰頂の上に毫毛を抖く」を欠いている。この「西遊補答問」は第十一回が書かれる前に成立したと思われる。

18　第十六回には鯖魚精が小坊主に化けて登場する。「ふと見ると、木叉が色白の和尚を連れ、東南の方角から瑞雲に乗ってフワリと降りて来ながら叫んだ」とか、「さて、悟空は空中から接近するうち、お師匠様のお側に小坊主が坐り、そこから妖気が高々と吹き上がっているのを見て、すぐにこれは鯖魚精が化けたものと推察し、耳から棒を取り出し、見境なく打ちかかった。小坊主はたちまち鯖魚精の屍に変わり、口から赤い光を放った。」と描写され、たしかに「牛首虎頭、豺声狼視」といような容貌ではない。

19　もともと「静嘯斎主人」とは董説の父董斯張の斎号であった。父の死後董説は父の書斎を使い、やはり静嘯斎主人を称したのである。

西遊補　「三たび芭蕉扇を調(うば)う」の後に挿入

静嘯齋主人著

第一回

牡丹は紅にして鯖魚[1]気を吐き
冤(うらみ)を送る文をもって大聖留連(うろつ)く
［牡丹の花が紅くなり、鯖魚が気を吐く
冤魂を祭る文章を読み上げつつ斉天大聖はうろつく］

萬物　從來　只だ一身
一身　還た有り　一乾坤
敢えて世間の與(ため)に明眼を開かんや
肯えて江山を把りて別に根を立てんや舊詩[2]

［万物は開闢以来ただ一つの体(ボディ)から成る、一つの体(ボディ)の中にさらにまた一つの宇宙が含まれている。世俗の人間のために目を開いてやるものか、私の体(ボディ)の外にわざわざ山川草木を仕立てて別世界(アナザーワールド)など築いてやるものか］

物語の構想を提示。

この書物には鯖魚の誘惑に心猿[3]が惑わされるが、結局この世のしがらみの多くは浮き雲や夢幻に等しい、と見極める物語が記されている。

さて、三蔵法師の師弟四人が火焔山[4]を離れてから月日が経ち、また新緑まぶしい春がめぐってきた。三蔵は、

「吾々四人は終日駆けずり回っているが、いつになったら如来さまにお目にかかれるやら。悟空よ、西方浄土への道筋をお前は何度か通っただろう。まだどれほど旅程が残っており、妖怪はさらに何匹おるのだ？」

「お師匠様、御安心下さい。弟子たちが頑張れば、どでかい妖怪でも恐くは

1　一名を「青魚」という。『本草綱目』鱗部巻四十四青魚の項に、「時珍曰く、青亦た鯖に作る、色を以て名づくなり」とある。淡水魚で、南方では膾にするという。

2　舊詩　宋の邵雍の「觀易吟」（伊川擊壤集巻十五）「一物　其來(じゅうらい)　一身有り、一身　還た有り一乾坤。能く萬物の我れに備わるを知らば、肯えて三才を把りて別に根を立てんや。」に基づく。従って「舊詩」とは邵雍のこの詩を指す。第一句目の「萬物」を「一物」に換え、第三句目を大きく改めている。「萬物　從來　只一身、一身　還た有り一乾坤、敢えて世間の與に明眼を開かんや、肯えて江山を把りて別に根を立てんや」は内側へ内側へと閉じていこうとする『西遊補』全体の構想を暗示する重要な表現と考える。

3　猿のように騒がしい心、たいてい「心猿意馬」とつづく。ここでは孫悟空を指す。用例としては『警世通言』巻二「莊子休盆成大道」に、「那婆娘心猿意馬、按捺不住」（その荘子の妻は心が騒ぎ、どうにもがまんできなくなった）とある。

4　三蔵たちの行く手を阻んだ燃えさかる山。『西遊記』（以下『記』と略称）六十～六十一。

ありません。」

言い終わらないうち、ふと見ると前のほうに山道が一筋、散ったばかりの花びら、散って日にちが経った花びらが、道いっぱいに錦をしきつめ、竹の枝が斜めに生えたあたりに、牡丹の木が一本突き出ていた[5]。

名花纔に放き錦は堆を成し、群芭を壓し盡くし敢えて奇を鬪わせんや。細かに明霞を剪りしごとく日を迎えて笑い、弱げに芳露を含み風に向いて欹く。雲は國色[6]を憐しみ　来たりて護を爲し、蝶は天香を戀い去ること遅からんと欲す。春宮に嚮いて顔色を問わんと擬、玉環[7]嬌きて倚る半酣の時舊詩[8]

［名花が開いたかと思いきや錦織（他の花々を指す）は丘のように積み重なり、あらゆる花を圧倒し尽くして競うものとてない。細やかに朝焼けの光を切り裂いて日に向って微笑みかけ、か弱げに露を含んで風になびいて傾く。雲は牡丹をいとおしんで護衛をつとめようとやって来るし、蝶々は牡丹を恋い慕って立ち去りがたい様子。後宮の女性たちと美しさを較べるとすれば、ほろ酔いで色っぽく寄りかかる楊貴妃に譬えられよう］

「お師匠様、あの牡丹はほんとに赤いですね。」

「赤くなんかない。」

「お師匠様は春の陽気で、目までやられちまった。こんな真っ赤な牡丹を、赤くないと御不満だ。お師匠様、馬から下りてお坐りになったほうがよろしいかと。私が大薬王菩薩を呼んで来て目がよく見えるように頼んでみます。かすんだ目のまま無理に進んでいって突然道をまちがえて、他人の事に首を突っ込みなさいませんようにお頼みします。」

「チンピラ猿め！お前のほうこそ目がくらんでいるくせに、逆にわしの方にかすみ目を押し付けてくるとは。」

5　同様な発想は宋の葉適の「小園に遊びて値わず」詩の「應に嫌うべし屐齒の蒼苔を印むを、十たび柴扉を扣くも九たびは開かず。春色　園に満つるも関じ住ず、一枝の紅杏　牆を出でて來る」にもある。この詩は童蒙用の教科書『千家詩』にも採られているので、董説も見ていたことは間違いない。

6　「國色」「天香」が牡丹を指すのは古来の伝統、例えば白居易の「山石榴花十二韻」詩に、「此の時國色に逢う、何處に天香を覓めん」とある。

7　玉環　宋の樂史撰『楊太真外伝』に、「楊貴妃、小字玉環、弘農華陰の人なり。後に居を蒲州永樂の獨頭村に徙す。高祖の令本、金州刺史、父の玄琰、蜀州司戸。貴妃　蜀に生まる」とある。

8　舊詩　未詳

「お師匠様の目がくらんでないなら、なぜ牡丹は赤くないとおっしゃるんで。」

「牡丹が赤くない、などとは言っとらん、牡丹が赤いのではない、と言っただけだ。」

「お師匠様が牡丹が赤いのではない、と言われるのは、陽光が牡丹を照らし出すので赤いのだ、という意味ですな。」

三蔵は孫空が陽光なんぞを引き合いに出してきて、考えが的外れになってきたので、

「まぬけ猿、おまえ自身が赤いのに、牡丹やら陽光やらを持ち出してきて、無関係なものまで巻き込みよって。」と罵った。

「お師匠様、何をたわけたことを。おれの体は一面の黄色い毛、おれの虎皮の裙(はかま)はまだらの縞模様、おれの道服だって黒でもない白でもない代物。お師匠様、いったいおれのどこに赤さを見出されたので？」

「お前の体が赤いと言ったんじゃない、おまえの心が赤いと言ったんだ。」

そこで大声で「悟空よ、わたしの偈[9]を聞け」と言うやいなや、馬上で偈を唱えた。

牡丹は紅ならず
徒弟の心紅なり
牡丹の花落ち尽くさば
正に未だ開かざると同じなり

［牡丹は紅くはない、紅いのは弟子の心。牡丹の花がすべて落ち尽くせば、まだ花が開かぬのと同じだ］

偈を唱え終わり、馬が百歩ほど進んだ時、見ればちょうど牡丹の木の下に、数百人のうら若き乙女たちが、野の花を摘んだり、草を結んで占ったり、女の子男の子を抱いたり、手を引いたり、いちゃついたりふざけたり。と、突然東方からやってきたお坊さんが目に入ったので、みんなが袖を口元に当て、アハハオホホと笑うのだった。

三蔵は疑惑が兆し、ただちに大声で、

9　偈　仏教の教義や悟りの内容を説く四行詩。例えば『五燈會元』巻第一記載の二十二祖摩拏羅尊者の偈に、「心は萬境に隨いて轉ず、轉ずる處　實に能く幽なり。流れに隨いて性を認得すれば、喜は無く亦た憂いも無し」とある。

「悟空、吾々はほかに寂しい静かな道を探して行こう。こんなに青々した春の野に、美少年や美少女の一群、なにかもめ事を起こし、つきまとってくるに決まってる。」

「お師匠様、おれはずーっとあなたに言おうと思っていたことが一つあります。あなたの不興を買うのが恐くて言い出す勇気がありませんでした。お師匠様あなたには二つの欠点があります。ひとつは考えすぎ、もう一つは文字禅です。考えすぎとは、あれもこれも恐がりすぎるのがそうです。文字禅とは、詩歌で禅理を語り、故事を引いては今の出来事を考証し、お経や偈を持ち出すのがそうです。文字禅は本物の悟りとは無関係、考えすぎは逆に妖怪を呼び寄せることになります。二つの欠点を取り去ったら、ちゃんと西方へ上れます。」

三蔵はひたすら不愉快であった。悟空は、

「お師匠様はまちがっておられます。あちらは在家の人、こちらは出家の身。共に一本の道を歩きつつも、心の持ちようは違う、というものですよ。」

三蔵はそれを聞くと馬に鞭打って進んで行った。なんと一群の乙女たちの中から子どもが八、九人飛び出してきて、グルグルまわりながら男の子女の子手をつないで輪を作り、三蔵をとりまき、じっと見つめては飛び跳ね、飛び跳ねてはわめきちらす。

「この子はおっきくなったくせに、まだ百家衣[10]を着てやがる。」

三蔵はもともと静寂がお好み、子どもたちが付きまとうのに耐えられるわけもない、なんとかなだめすかして離れてもらおうとしたが、まったく立ち去ろうともせず、叱りつけても行こうとしない。ひたすら、

「この子はおっきくなったくせにまだ百家衣を着てやがる」をくりかえすばかり。

三蔵はどうすることもできず、やむなく身につけていた袈裟を脱ぎ、ふろしきの中にしまって草の上に坐った。

子どもたちは三蔵にはかまわず、またわめくのだった、

「おまえの一色だけの百家衣をわたしらに恵んでちょうだいな。おまえが恵

10　百家衣　赤ん坊の服は千人針のように近所からもらった端切れで作り、それを着ると長生きするとされる。その百家衣とつぎはぎだらけの袈裟をわざと混同した。陸游「次韻して楊伯子主簿贈らるるに和す」詩（『劍南詩稿校注』巻二十一）に、「文章　最も忌む百家衣、火龍　黼黻　世は知らず」とある。

んでくれなけりゃ、家へ帰ってかあちゃんに、水草色の、断腸色の、緑の柳色の、比翼色の、晩霞色の、燕青色の、醤油色の、天玄色の、桃紅色の、玉色の、蓮根色の、青い蓮華の色の、銀青色の、魚肚の白色の、水墨画の色の、石藍色の、蘆の花の色の、緑色の、五色の錦色の、荔枝色の、珊瑚色の、鴨頭の緑色の、廻文の錦色の、相思錦色[11]の百家衣を一枚作ってもらうわい。わたしらはおまえの一色だけの百家衣なんかいらないわい」

三蔵は目を閉じて、黙って答えようとしない。八戒は三蔵の心も知らず、またもや男の子や女の子をからかってやろうとして、

「そこの乾兒子に湿兒子[12]、いいことして遊ぼうよ。」

悟空はその様子を見てイライラし、耳の中から金箍棒[13]を取り出し、手に取って子どもたちをむやみに追い立てた。子どもたちは驚いてみんなこけつまろびつ逃げていったが、悟空はまだ怒りが収まらず、すぐに追跡、棒をブン廻してなぐりかかり、哀れ唐子風髪にリンゴほっぺの男の子女の子たちは、春の野の人魂になってしまったのだ。

さて牡丹の下の一群の美人たちは、悟空が男の子女の子を殴り殺すのを見て、あわてて花摘みの籠を投げ捨て、めいめい川辺に走り、石ころをつかみ、悟空を迎え撃った。悟空は眉毛一本動かさず、軽々と棒を一振り、またもや地面を箒で掃くみたいに一人残さず殴り殺してしまった。

涙を流したところが情の根なのだ。

もともと孫大聖[14]は勇猛果敢ではあったが、情け深いのが本性。ただちに棒を耳の中に収納するや、知らず知らずのうちに涙を流し、後悔の念に駆られて、

「お天道様、お天道様、悟空は仏法に帰依してから、感情と短気を押さえ、滅多矢鱈に人を殺したことはありませんでした。今日は突然憤怒に駆られ、妖怪でもなく強盗でもない、老若男女五十人余りの命を奪ってしまいました。罪業の深さを忘れていたのです。」

二歩ばかり歩いてまた恐くなり、

11　同類の名詞をあまた並べるのは董説がよく使う手法で、以下第三回の武器をつらねるところ、第四回の鏡をならべるところ、第七回の虞美人の居室に置かれた化粧道具をつらねるところ、第八回の地獄の役人の名を列挙するところなど、枚挙にいとまがない。

12　乾児子は養子の意味で、「乾」にひっかけて「湿（実）子」のしゃれである。

13　金箍棒　フルネームは「如意金箍棒」。重さは一万三千斤、両側に金のたががはまり、中間は鉄からなり、長さを自由に変えられる（『西』三回）。

14　孫大聖　玉帝から悟空が賜った称号「齊天大聖」に由来する呼称（『西』四回）。

「おれは将来の地獄のことばかり考えて、今の地獄のことをとんと忘れていた。おれがこの間妖怪を一匹二匹たたき殺したら、お師匠様はすぐに呪文[15]を唱えようとしたし、強盗を何人か殺したら、お師匠様はおれをすぐに追放した。今日お師匠様がこの一群の死体を見て腹を立て、万が一例の呪文を百遍も唱えたら、この威風堂々たる孫大聖（おれさま）がたちまち赤剥けサルにされちまう。なんとも面子が立たない。」

結局はサルの知恵ではあったが、悟空はなかなか聡明で、あるアイディアが浮かんできた。

「おれのところの和尚さんは、文芸を解する人だが、慈悲深すぎて、人の言うことを信じすぎるきらいがある。おれは今日「冤（ぎせいしゃ）を送る文」[16]一篇をこしらえ、オンオンワンワンの泣きっ面を作って、朗読しながら歩いていく。おれがこんなに号泣するのをお師匠様が見たならば必ず疑いの念が三分起こり、

「悟空よ、日頃の気の強さはどこへ行った」と声をかける、おれは、

「西方への途上に妖怪がいます」とだけ言う、

お師匠様は疑いの念が七分がた増し、さらに、

「妖怪はどこに、何という名か？」と尋ねる。おれは、

「妖怪は打人精と言います。お師匠様、もしお信じになられぬのなら、男や女がひとかたまりになり、どれもこれも血まみれの亡者に変わっているのを御覧ください」とだけ言う。

お師匠様は妖怪が獰猛だと聞いて恐れおののくだろう。

八戒は、「もう一行を解散しようや。」

沙悟浄は、「やみくもに前進！」

おれはみんなの右往左往振りを見て、慰めてやらねばと思い、

「すべて霊山の観世音菩薩のお力により、妖怪の巣窟には今じゃ瓦一枚残っていません」とひとこと言ってやる。」

悟空はすぐに石を拾って硯の代わり、梅の枝を折って筆の代わり、泥を墨

15　呪文　いわゆる金箍呪経、観音菩薩が三蔵に授けた。唱えると悟空の頭にはめた金輪がしめつける（『西』十四回）

16　冤を送る文章　原文は「送冤文」。唐の韓愈に「送窮文」があるが、内容は重ならない。「送冤文」は死者を哀悼する祭文の文体で書かれ、ひたすら若い男女の早逝を悼む。僻典を重ねているらしいのだが、はっきりと指摘できるものは少ない。

の代わり、竹を削って紙の代わり、「冤」を送る文章を作り、秀才のように袖をまくりあげ、ゆったりと体をゆすり、大またに歩きながら、声を張り上げ朗誦した。その文に曰く、

維れ大唐の正統の皇帝が勅もて百宝の袈裟、五珠の錫杖を賜い、號を御弟と賜る唐僧玄奘大法師門下の徒弟第一人、水簾洞主齊天大聖・天宮の反寇・地府の豪賓、孫悟空行者、

謹みて清酌庶羞の儀を以て、箋を無讐無怨の春風裏の男女の幽魂に致して曰く、

嗚呼、門柳　金に変じ、庭蘭　玉を孕むも[17]、乾坤は仁ならず、青歳は穀勿し。胡爲れぞ三月桃花の水、環佩　湘に飄い[18]、九天白鶴の雲、蒼茫として烟に鎖さるや。嗟、「鬼」や、それ汝を送らんか。余竊かに君の爲にこれを恨む。

然りと雖も、龍蛇を銅棟に走らせ、室の裏に蠶に臨み、風雨を玉琴に哭し、樓中に虎嘯く、此れ素女[19]の周行なり。胡為れぞ春袖は「成」りて春草は緑に、春日は長く春壽は促さるるや。嗟「鬼」やそれ汝を送らんか。余は竊かに君を恨む。

洗子銭は本来秦の制度である。

嗚呼、竹馬は一里のみ、螢灯は半帷のみなるに[20]、造化の小兒[21]、宜しく怒り有らざるべし。胡爲れぞ洗銭[22]未だ賜らざるに、鳧舄を飛ばして[23]西

17　✱韓鄂の『歳華紀麗』に「門柳　金に變じ、庭蘭　玉を孕む」とある。

18　環佩　湘に飄い　阮籍の「詠懐詩」第二首に、「二妃　江濱に遊び、逍遥風に順いて翔ぶ。〔鄭〕交甫は環佩を懐き、〔二妃〕は婉孌として芬芳有り」とある。董説は「西遊補答問」でも、西遊補の世界を操る妖怪を「婉孌」と形容しており、「詠懐詩」を意識しているのはおそらくまちがいない。

19 『史記』巻十二孝武本紀に「泰帝は素女をして五十弦の瑟を鼓かしむ、悲し、帝禁ずるも止まず、故に其の瑟を破りて二十五弦と爲す」とあり、ここの素女は黄帝と同時代の神女を指す。

20　螢灯は半帷のみなるに　蛍の光が帷に詠ずる情景描写としては、梁簡文帝「詠螢」詩に「屏には疑う神火の照らすかと、簾には似る　夜珠の明かと。」とある。

21　造化の小兒　天帝を貶めた呼称。語は『新唐書』巻二百一杜審言伝に基づく。「初め、審言病甚だし、宋之問・武平一等何如なるやと省候するに、答えて曰く、甚だ造化の小児に相苦しめ爲る、尚お何をか言わんや。」金庸の武侠小説『倚天屠龍記』では、登場人物の一人謝遜が、天を「老賊天」と罵る場面があり、同工異曲の妙がある。

22　洗銭　赤ん坊が生まれて三日目、あるいは初めての満月の夜に親戚や客を迎えて洗児会を行う。その際盥に投げ込む銅銭を「洗児銭」といい、それを指す。唐王建「宮詞」の七十一に、「妃子　院中初めて降誕し、内人争いて乞う洗兒銭」とある。また楊貴妃が安禄山の誕生日の三日後に、安禄山を「大なる襁褓」に包み遊んでいたところ、玄宗皇帝が「浴兒の金銀銭」を賜ったというのはあまりにも有名な話である（『資治通鑑』巻二百一十六玄宗天寶十載正月の条）。

淵に浴し、雙柱[24]初めて紅いなるに、鵝衣を服して紫谷に遊ぶや。嗟鬼（ああもうじゃ）やそれ汝を送らんか。余は竊かに君の爲にこれを恨む。

然りと雖も、七齡の孔子、帳中に蟋蟀（こおろぎ）の音鳴き、二尺の曾參、階下に荔枝の獻を拝す。胡爲れぞこの正則を講ぜざるや。玉を南の疇（うね）に剪（き）り、荷を東浦に砕く。浮絳の棗は袖にせず、垂乳の桐は哺せず。嗟鬼（ああもうじゃ）や、それ汝を送らんか。余は竊かに君を恨む。

嗚呼、南北西東、未だ招魂の句を賦せず、張錢徐趙[25]、古塚の碑を占め難し。嗟鬼（ああもうじゃ）や、それ汝を送らんか。余は竊かに君の爲にこれを恨む。

［大唐の正統の天子が詔勅を下して、百宝の袈裟・五珠の錫杖を賜い、「御弟」という号を賜った唐僧玄奘大法師門下の一番弟子で、水簾洞主・天宮の反逆者・冥府の賓客である孫悟空行者が謹んで酒肴をお供えし、春風吹く中、仇も怨みもなく死んでいった男女の幽魂に対し奉り一文を捧げます。ああ門の柳は金色に変わり、庭の蘭が玉（つぼみ）をつけたが、天地は無慈悲で春なのに何の結実もない。春三月、桃の花咲く水辺で、何故帯玉をした神女江妃が湘水に漂い、空高く雲の彼方に飛んで行った白鶴がぼんやりとしたもやに閉ざされてしまったのだろうか。ああ亡者たちよ、おまえたちをあの世に送ってやろう。吾輩はおまえたちのために憤慨する。とは言うものの、龍や蛇を銅の棟木に飾りつけ、部屋の中で蠶の世話をし、玉琴の伴奏裡、風よ雨よ止（や）め、と泣き叫び、高楼の中で虎のように吼える、これらはみんな素女の行為である。何故に春着の袖は赤いのに春の草は緑なのか、何故に春の日は長いのに春の寿命は促されてしまうのか？ああ亡者たちよ、おまえたちをあの世に送ってやろう。吾輩はひそかにおまえたちのために憤慨する。ああ竹馬は一里も進めばこわれるし、蛍の光はカーテンの半分の距離しかとどかない。創造者の小童めは怒る理由もない。なぜ出産祝いももらわぬのに、ただちに靴を飛ばして西の淵で水浴し、老子は二本の鼻梁が赤くなったばかりなのに、鵝

23　鳧舄を飛ばして　後漢葉県の令であった王喬が毎月一日と十五日に任地から朝廷に帰還するので、皇帝が不思議に思い調べさせたところ、「其の至るに臨みては、輒（つね）に双鳧の東南より飛来する有り。是に於いて鳧の至るを候（ま）ちて、羅（あみ）を挙げてこれを張るに、但だ一隻の舄（くつ）を得たるのみ」（『後漢書』巻八十二上王喬伝）

24　雙柱　『史記』巻六十二老子列伝の『正義』が引く『神仙伝』に、「〔老子は〕鼻に雙柱有り、耳に三門有り」とあるのに基づく。

25　張錢徐趙　おそらく童蒙教科書『百家姓』の冒頭「趙錢孫李」を意識した表現である。

衣を着て紫谷に行くのだろうか？ああ亡者たちよ、おまえたちをあの世に送ってやろう。吾輩はひそかにおまえたちのために憤慨する。とは言うものの、七歳の孔子はカーテンのもとで、コオロギをまねて鳴き、身長二尺の曾参は荔枝を階下から献上した。なぜみなこのような正道を踏まないのだろうか。玉を南の畝に切断し、行李を東の水辺で粉々に砕く。まだ熟していない棗は袖に入れないし、桐から垂れる樹液は口にしない。ああ亡者たちよ、おまえたちをあの世に送ってやろう。吾輩はひそかにおまえたちのために憤慨する。ああ南北西東、どこの人ともわからぬので、亡魂を招く文章も起草のしようがないし、張錢徐趙、名前もわからぬので、古い墳墓の神道碑に名前も書き付けられない。ああ亡者たちよ、おまえたちをあの世に送ってやろう。吾輩はひそかにおまえたちのために憤慨する〕

悟空が読み終わると、とっくに牡丹の木の下まで来ていた。ふと見ると、お師匠様は坐ったまま頭を垂れて居眠り、沙悟浄と八戒は石を枕にしてぐっすり眠っている。悟空はほくそ笑み、

和尚は頭を垂れて居眠り、心猿（さる）はスタコラ逃げ出した。

「和尚はふだんは少しは習練を積んでいるので、決してこんなに眠りこけないのに、今日はひたすら星回りがよく、呪文の苦しみを受けずにすみそうだ。」

悟空はそれから草花を一本摘んでくるくる丸めると、猪八戒の耳につめ、わめいた、

「悟能よ、夢想錯乱をやめよ。」

八戒は夢の中でフンガフンガと答え、

「お師匠様、あなたさまが悟能（わっし）をお呼びになったのは何の御用で？」

悟空は八戒が夢の中で自分をお師匠様とまちがえているとわかり、すぐにお師匠様の声に変わった、

「徒弟（でし）よ、たった今観音菩薩がここに来られ、お前によろしくとのことだった。」

八戒は目を閉じたまま、草むらでフンガフンガ言いながらむやみに寝返りをうち、

「菩薩はわっしのことを何か言っておられましたか？」

「菩薩が何も言わぬわけはあるまい。菩薩はたった今わたし〔三蔵〕を品評し、そのうえお前たち三人を品評された。まず最初に、わたしは仏に成れない、わたしには西天に上らせないとおっしゃった。それから悟空はきっと仏

になれる、悟空に単独で西天に上らせる、悟浄は和尚になれる、西方への途上にある清浄な寺院で修行してもらう、とおっしゃった。菩薩は三つの事をおっしゃられた後で、おまえの方をちらっと見て言われた、

古本の『西遊記』をきちんと踏まえる。

悟能はこんなに眠り好きでは西天には上がれない。あいつに伝言してくれ、「おまえを真真・愛愛・憐憐のムコにさせてやる[26]。」とな」

八戒は、「わしは西天もいらん、憐憐もいらん、とにかく半日ぐっすり寝たいねん。」

言い終わってまたフンガフンガァと一声、まるで牛の鳴き声のよう。

悟空は八戒が目覚めないのを見て大笑い、

「おとうと弟子よ、おれは先に行くぞ。」

とうとう西の方へ托鉢に行くのであった。

（評）悟空が男の子女の子の作った手つなぎの輪をぶちこわしたのは、情の根を断ち切る手段であった。残念なことに慈悲心が生じたために、数多くの妄想を引き起こしたのであった。

26　真真・愛愛・憐憐の三人は、八戒の道心を試すために菩薩が化けた美女。『西』二十三回。

第二回

西方の路に新唐は幻出し
緑玉殿に風華（ふうりゅう）天子あり
［西方浄土への道に新唐が出現し
緑玉殿に風流な天子がいた］

知らず知らずのうちに情の魔に入り込んだ。

これ以後、物語りは「悟空は用い尽くす千般の計、祇だ人を迷わさんと望み却って自ら迷う」［悟空はあらゆる手段を尽くして、人を惑わそうとして自分を惑わした］[1]という展開になる。

さて悟空は空中に飛び上がり、あちこち見まわして托鉢する場所をさがしていたが、四時間余りさがしても、まったく人家が見当たらなかった。あせった悟空、筋斗雲を下げ、もと来た道へ引き返そうとしたその時、十里のかなたに大きな城郭が目に入った。悟空はただちに急ぎ雲を飛ばして行って、ながめやると、城壁の上には緑色の錦の旗がはためき、金色の篆書で字が書かれていた。

びっくり！

大唐の新天子・太宗三十八代の孫・中興皇帝[2]

悟空は突然「大唐」の二文字を見て、全身に冷や汗が吹き出し、こう考えたのだった、

「おれたち西方へ上っているのに、なぜ東の方へ下っちまったんだ？絶対ニセだ。なんて憎たらしい妖怪なんだろう」

また考えなおし、

あれこれ思い直す内に、早くも妖怪の罠にはまったのだ。

「おれは周天の説[3]を聞いたことがある。天はぐるりとまるいものとか。ひょっとしておれたちは西天を通り過ぎてしまい、今また東へまわって来たんじゃないだろうか。もしそうなら、どうてことない。もう一度ちょっとまわったら、そこが西天だ。あるいは本物かも」

1　悟空は用い尽くす千般の計　『記』五十一回の題目に「心猿　空しく用う千般の計、水火　功無くして魔を煉し難し」とあるのを襲っている。

2　唐朝は初代高祖から、太宗、高宗、中宗、睿宗（武后）中宗、温王、睿宗、玄宗、肅宗、代宗、德宗、順宗、憲宗、穆宗、敬宗、文宗、武宗、宣宗、懿宗、僖宗、昭宗、末代の昭宣帝まで、多めに数えても二十三代である。

3　周天の説　地球球体説は十七世紀イエズス会士たちによって中国にもたらされた（ニーダム『中国の科学と文明』第五巻思索社一九九一年刊322頁）。作者はこの説に従って「おれは周天の説を聞いたことがある。天はぐるりとまるいものとか。ひょっとしておれたちは西天を通り過ぎてしまい、今また東へまわって来たんじゃないだろうか。もしそうなら、どうてことない。もう一度ちょっとまわったら、そこが西天だ」と悟空に言わせているのである。

悟空はすぐに考えなおし、

「うそだ、うそだ。西天を通り過ぎてしまったからには、仏さまは慈悲深い方なのに、なぜおれに一声かけてくれない。ましておれはあの方に何度か会ってるが、薄情不義理な人間じゃない。やはりニセモノだ」

ただちに思いなおし、

「おれさまはもうちょっとで自分のことを忘れるところだった。おれが当時水簾洞で妖怪をしていたころ、兄弟分に碧衣使者というやつがいた。そいつはおれに『崑崙別紀』[4]という本を送ってくれたが、こんな一節があった。「中国なるもの有り、本もと中国に非ずして、中国の名を慕う、故に其の名を冒すなり」[中国という国がある、もともと中国ではないのだが、中国の名を慕ってその名を僭称したのだ]この場所はきっと名前を僭称している西方の国だ。やはり本物だ」

瞬時にして悟空は思わずあっと声を出して叫び、わめき散らした、

「ニセ、ニセ、ニセ、ニセ、ニセ！やつらが中国マニアだったら、ただ「中国」とだけ書くはずで、なんで「大唐」なんて書くんだ？それにお師匠様がいつもおっしゃっている通り、大唐皇帝はピカピカなりたての天下人なのに、やつらはどうしてすぐにそれを知って、こんなところで旗印を立てかえられる！？絶対本物じゃない。

かなり長くためらっていたが、まったく考えがまとまらないのだった。

両側からの描写は波瀾に富む

悟空は瞳を凝らし気を沈め、下の方を眺めると、また「大唐の新天子・太宗三十八代の孫・中興皇帝」の十四文字が見えた。悟空は跳ね上がったり、わめき散らしたり、さらには空中で大いに罵った、

「でたらめだ、でたらめだ！お師匠様が大唐の国境を出てから、今日まで二十年にもならない。まさかやつらのところじゃ何百年もたったわけじゃあるまいな。お師匠様は凡人の肉体なんだから、たとえ神仏の世界に出入りし、蓬莱島へ行ったり来たりしたとしても、常人と同じように日々を過ごすんだから、なんでこんなに違うんだ？絶対にニセモノだ」

悟空はまたちょっと考えて、

「まだわからんぞ。もし一か月に一人の皇帝だったら、四年もしないうちに三十八人が全部交代しちゃうぞ。ひょっとすると本物だ」

4　『崑崙別記』　未詳、おそらく架空の書物である。

夢の中の光景

悟空はこの時まさに「疑団　未だ破れず、思議するも空しく労(つか)る」（疑いが解けなかったので、あれこれ考えたがまったく無駄だった）という状態。そこで筋斗雲をぐっと下に向け、真言(じゅもん)を念じ、土地の氏神を呼んで事情を聞こうとして、十遍も念じたが、土地の氏神は全然やって来なかった。

悟空は心の中で、

「いつもはちょっと呪文を念じると、すぐにヘイコラしてやって来るのに、今日はどうしてこんな有様なんだ。緊急事態なので今連中を責めているひまはない。まずは当直の守護神[5]を呼べば、自然にはっきりするはずだ」

悟空はまた、「当直のみなさんどちらに？」と、空に向かって叫ぶこと数百回、まったく反応がない。悟空は激怒、ただちに大いに天界を騒がせた時の姿を現し、棒をちょっと振ると壺の口位の太さになり、身を躍らせてさらに空中に飛び上がり、乱舞乱跳、しばらくの間はねまわっていたが、神様半人も答えてくれないのだった。

まぼろし

悟空はいよいよ腹が立ってきて、まっすぐ霊霄殿[6]に昇り、玉帝に会って白黒つけようとした。ところが天へ昇ったと思ったら、天門はぴったり閉ざされていた。悟空は、「開門、開門！」と叫んだ。すると天門の内側から答える人がいた、

「時宜をわきまえないたわけめ、うちの霊霄殿はとっくに盗まれてしまい、おまえが昇る天などないわい」さらにその横でもう一人が笑いながらこう言うのが聞こえてきた、

さらなるまぼろし

「兄貴よ、あんたはまだ知らんな。あの霊霄殿がなぜ盗まれたかを。実は五百年前に孫(そん)という弼馬温(ひっぱおん)[7]がいて、大いに天宮を騒がせたが、霊霄殿までかっさらったことはなかった。それを恨みに思い、徒党を組み、取経を名目に西方に住む同類の妖怪と手を結び、ある日突然妖怪どもをそそのかし、トリッ

5　原文は「値日功曹」。「功曹」は六丁六甲、五方揭諦、護駕伽藍らとともに観音菩薩から派遣されて陰ながら三蔵法師を守護する当番の守護神。『西』十五回。

6　霊霄殿　通俗小説の世界では天帝の住まう宮殿を指す。『記』第一回にも、下界に生まれた「石猴」の金色の眼光が高々と上空に放射される場面に、「驚動高天上聖大慈仁者玉皇大天尊玄穹高上帝、駕座金闕雲宮靈霄寶殿、聚集仙卿、見有金光焰焰、即命千里眼順風耳開南天門觀看」（高天上聖大慈仁者玉皇大天尊玄穹高上帝を驚かせ、天帝は金色に輝き雲霞がかかる靈霄寶殿に出座され、ただちに千里眼順風耳に南天門を開け様子を見るよう命じた）とある。

7　天馬の馬屋番。『西』４回で悟空が玉帝から与えられた官職。「玉帝傳旨道、「就除他做箇弼馬温罷。」衆臣叫謝恩、他也只朝上唱箇大喏」（玉帝は言った、「それならば彼を弼馬温に任命せよ。」臣下たちはお礼を申し上げ、悟空は平伏した）とある。

クを使って霊霄殿を盗み出させた。これこそ兵法の中の「他人を以って他人を攻む、勝たざる無きの計」だ。サルはあれでなかなか知恵者である。たいしたもんだ、たいしたもんだ」

悟空はそれを聞いて、おかしいやら、腹が立つやら、悟空は強気でせっかちな男、どうしていわれなき濡れ衣を着せられて我慢できようか。前にも増してゲンコツを振り回し足でけりつけ、「開門！」と叫ぶのだった。

中の人はまた、

「もし是非とも天門を開けさせたいなら、五千四十六年と三か月ばかりして、うちの霊霄殿が落成開門となった暁に、来賓各位をお迎えするのを待たれてはいかがかな」

さて悟空は玉帝に会って、霊妙な紫色の文字で書かれた書物[8]を出してもらって、大唐の真偽を確かめようと願っていたのに、かえって大恥をかかされた。仕方なく筋斗雲の頭を下げて、また大唐の国境へやって来たのだった。

この一句は以下の活動方針

悟空は、「おれは本気になって大唐の中へ入り込み、そこがどうなっているか見てやるまでだ」と独り言をいいながら、ざっくばらんに城門に入っていった。そこの門番の兵士が言った、

「新天子の命令で、異様な言語・異様な服装の者は逮捕して斬首する[9]。小坊主さんよ、お前は家も女房もないだろうが、自分の命を大切にするがよい」

悟空は拱手礼[10]をし、「大将のお言葉、本当に身にしみます」

すぐに城門を出て行き、白い蝶に変身、「美人の舞」をちょっとやり、「琵琶を背に」をまたちょっと、瞬時に五花楼の下に着き、ただちに玉闕（ごしょ）に飛んで入り、宮殿で羽を休ませた。まことに美玉製の　枢（ちょうつがい）　にかすみがかかり、青い高閣は雲を身に纏（まと）わせ、神様も見たことのない、仙人の住居もまねられないほどの建物であった。

天は回りて金氣合し
星順いて玉衡平らかなり
雲は生ず翡翠殿

8　霊妙な紫色の文字で書かれた書物　原文は「靈文紫字之書」。『雲笈七籤』巻七紫字に「靈文は洞標に鬱として、紫字は瓊林に煥たり」とあり、神秘的な書物を指す。

9　異様な言語・異様な服装の者は逮捕して斬首する　『礼記』王制下に「關は禁を執りて譏（しら）べ、異服を禁じ、異言を識（しる）す」とあるのに基づく

10　手を胸の前で合わせ感謝の意を表す。

日は麗らかなり　鳳凰城舊詩[11]

［天は回転して金氣は合わさり、星はその動きに従い北斗七星は平穏に運行している。雲は翡翠殿から湧きあがり、日は鳳凰城を麗らかに照らす］

悟空はなかなか見飽きなかったが、ふと目を上げれば宮殿の門にかかる額に「緑玉殿」の大きな三文字、傍に細字で一行「唐の新天子・風流皇帝元年二月吉日に立つ」と注記がある。殿中は静まりかえり、両側の壁に二行の墨跡があるばかり。その文には、

奇文

唐未だ命を受けざる五十年、大国は斗ではかるが如くおおし。唐　天命を受くる五十年、山河飛びて星月走る。新皇帝　命を受くる万万年、四方は周宣の詩[12]を唱えん。　小臣張丘謹みて祝う

［唐がまだ天命を受けてはいなかった五十年前、大国は枡ではかるほど多かった。唐が天命を受けて五十年、山河が飛び星や月が走るように時間が過ぎた。新皇帝が天命を受けて一億年、四方の国々は中興の讃歌を唱和するであろう。］

悟空は見終わり一人笑いをし、

「朝廷にこんな小臣がいたら、皇帝が風流でないわけがなかろう」

女官の口を借りて絵に描いたような場面を描写、一句一句がまさに神技だ。

言い終るや、突然女官が一人現れ、青い竹箒を一本手にし、地面を掃きながら独り言、

「フフフ、皇帝も眠り、宰相も眠り、緑玉殿は今や眠仙閣に変わってしまった。昨夜うちの風流天子は傾国夫人のお輿入れで、御苑の飛翠宮で宴会を開き、一晩中飲んでおられた。まず一面の高唐鏡[13]を取り出し、傾国夫人を左側、徐夫人を右側に立たせ、三人肩を並べて鏡にお映りになった。天子が、

委曲を尽くす

「両人は器量よしじゃのう」

11　舊詩　李夢陽『空同集』巻三十四・五言絶句「神京樂」其の二と全く同じである。この詩の「神京」は其の一に「薊谷は東海に襟られ、居庸は北門を鎖す。王者　本と外無く、天險　乾坤に壯んなり。」とあるので、北京を指すことは言うまでもない。荒井健先生示教。

12　周宣の詩　国家中興の讃歌である『詩経』大雅・雲漢の詩を指す。詩序に「雲漢は仍淑が宣王を美むるなり。宣王は厲王の烈を承け、内に乱を撥むる志有り。…天下は王化復た行われ、百姓が憂にかけられるを喜ぶ」とある。宣王は暴君とされる厲王の子、国を建て直し、中興の祖と仰がれた。

13　「高唐」は楚の雲夢沢にあった台観。男女密会の場を指す。楚の懐王が昼寝中に夢に現れた巫山の神女と交わったという故事に基づく。宋玉「高唐賦」（『文選』巻十九）に、「昔先王嘗て高唐に遊び、怠りて昼寝す。夢に一婦人を見る。曰く、妾は巫山の女なり。高唐の客と為る。君の高唐に遊ぶを聞き、枕席に薦むを願うと。王因りてこれを幸して去る」とある。

と、傾国夫人がまた、

「陛下こそ美男子です」

　天子は振り返って、わたしたちにお尋ねになった。と、その時お付きの宮女が三百と四人、一斉にお答え、

「やはり稀代の美男子でいらっしゃいます」

天子は大喜び、目を細めて大杯を飲み干された。

　ほろ酔い気分のころ、立ち上がって月見にお出かけ、天子は呵呵大笑、月の中の嫦娥[14]を指し、

「あれが朕の徐夫人じゃ」

徐夫人もまた織女と牽牛を指し、「あれが陛下と傾国夫人です。今夜は三月五日ですけれど、七夕を前借いたしましょうよ」

天子は大喜び、また大杯を飲み干された。

　酔っ払い天子が一人、顔は真っ赤、頭はフラフラ、足はよろよろ、舌はろれつがまわらず、三七二十一も二七十四もお構いなし、あっという間にどさりと徐夫人の体の上に倒れかかった。傾国夫人はあわてて坐り直し、雪のように白い肉布団となり、天子のおみ足の枕代わり。さらに徐夫人のお付きの娘が、ほんに物事をよくわきまえていて、その時海木香の花を摘み、ニコニコ笑って、徐夫人の背後にまわり、天子の頭上にそっと挿し、酔花天子のかっこうにさせた。これほどの快楽、さすがにこの世の蓬莱山だ。

三度使われた「去」の字はなんとも悲痛で、［漢の武帝の］柏梁台の歌会にもまさる。

　しかしよく考えてみると、昔天子の位に登った者も多く、風流（おしゃれ）天子になった者も少なくない。今となっては、宮殿は消え去り、美人も消え去り、皇帝も消え去った。秦・漢・六朝は言うまでもなく、うちの先代の天子だって、中年になると快楽追求に精を出し、珠雨楼台を建てられたが、あの楼台はあまりに精巧華麗で、上にはすべて白玉版の格子天井、四方は青い文様を彫った蔀戸で、北側は円霜洞が一つ、海面への日の出入りが眺められ、下の床板は黄金を嵌め込んだ紫檀作りだ。当時は蓮の翠の容貌、梅の花びらのような白い肌に、蟬の羽のようなうすものをまとい、麒麟の文様の帯をしめた美女が、蜀の笛と呉の琴を奏で、見る者は皆目がくらみ、聴く者は皆心がとろけた。

14　嫦娥　不老不死の薬を飲み月に飛び去った伝説の美女。『搜神記』巻十四に、「羿　無死の薬を西王母に請い、嫦娥これを竊（ぬす）みて以て月に奔る」とある。

昨日お妃様に言われて、東の花園へ庭掃除に行った時、わたしが低い塀越しにのぞいたところ、珠雨楼台はぺんぺん草に覆われ、一面雲かすみがかかるばかり。鴛鴦(おしどり)文様の瓦三千枚が今となっては千々に砕けて百万片。疾走する龍をあしらった梁、飛翔する鳥をあしらった棟(むなぎ)が、十文字に積み上げられている[15]。さらに、おかしなことが一つ、日がまだ高いというのに、井戸の中、松の木のあたりに、早くもいくつか火の玉が出現。よくよく見ても歌童(シスターボーイ)・舞姫一人見かけず、ただホトトギスが二、三羽その辺りで声高くまた低く、春雨そぼ降る中たえまなく鳴くだけだった。こう見て来ると、「天子庶民は同じく無有(きょむ)に帰し、皇妃村女も共に青塵(ちりあくた)と化す」という道理がわかる。

なんとも杜少陵［甫］の詩そのものだ。

女官の話の帰結がこれだ。

去年の正月元宵節(じゅうごにち)、松蘿道士という人が来たが、その話にはなかなかうなずけるところがあった。道士は、「わが風流天子がお好きなのは、絵画の中の人と風景でしょう」と言い、そこで「驪山図」[16]と題する絵画一幅を献上した。

駆山鐸を借用するのは、物語の基本線で、ここは伏線を張っている。

天子は御下問になった、「驪山は実在健在か？」

道士は即座に、「驪山は寿命が短く、たった二千年です」

天子は笑いながら、「二千年もあれば十分だろう」

道士、「臣(わたくし)は驪山が清一色でないのが不満です。土木と樹木の驪山が二百年、話題にされる驪山が四百年、詩文や書画に描かれる驪山が五百年、歴史書に記載される驪山が九百年、バラバラなものを寄せ集めて何とか二千年になるのです」

わたしはその日当直で、ちょうどあの道士の真ん前に立っていたので、一字一句、すべてはっきり聞き取れた。一年がたって、この間物知りの宮女が話していたが、なんと驪山図というのは、「駆山鐸」[17]を使っていた秦の始皇帝のお墓なんだと」しゃべり終わっては掃除し、掃除の手を止めてはしゃべ

15　時代は下るが、清の康熙年間に大学士であった馮溥が京師の東南隅に営んだ別墅は、当初の規模は三十畝、無数の柳を一面に植えていたため、「萬柳堂」と称した。「短牆の外を騎行する者は、望みて其の中を見る可し。徑曲がりて深く、其の窪に因りて以て池を爲り、其の土を累ねて以て山を成す。池旁は皆蒹葭、雲水蕭疎として愛すべし」という景勝地であった。ところが桐城派の文人劉大櫆が雍正年間の初めに訪れた時には、「猶お稍や亭樹有り」という状態、二回目には「尚(さき)の飛梁の水上に架かりし者は、今は水中に敧めに臥す」と建物が先ず朽ち、三回目には「凡そ其の植えし所の柳は、これを斬りて一株の存する無し」と何も無くなってしまった。ここの珠雨楼台の描写に通ずるものがある。（劉大櫆「遊萬柳堂記」による）

16　驪山図　始皇帝の墓の見取り図。『周禮』春官冢人に、「公墓の地を掌どる、其の兆域を辨じてこれが圖を爲(えが)く」とある。

りつづけた。

悟空は突然「駆山鐸」の三字を聞いて思った、

「山はどうやったら駆逐できるんだ？もしこの鐸（すず）があったら、妖怪の住む山に出会った時、あらかじめ山を駆逐しておけば、手間が省けちまう」

一人の侍従の姿に化けて宮女に駆山鐸の来歴を尋ねようとしたところ、突如宮殿の中からにぎやかに笛や太鼓が鳴り出したのだった。

（評）この回は三段に分けて読むこと。前の一段で風流天子の話が終わり、中間の珠雨楼台の一段にこの物語の主題が託され、後の驪山の一段は、大聖が鏡に入る話の伏線になっている。

17　驅山鐸　鐸は大型の鈴。『玉堂閒話』の「驅山鐸」（『太平廣記』巻三九九所収）に、宜春の鍾山のふもとを流れる宜春江において、「曾て漁人有り、鈎を垂れて一金鑠を得たり。これを引くこと數百尺にして一鍾を獲、又鐸の形の如し。漁人これを擧ぐるに聲有りて霹靂の如し。天晝晦く、山川振動して、鍾山の一面崩摧（くだ）すること五百餘丈。漁人皆舟沈み水に落つ。山摧ける處削らるるが如く、今に至るも存せり。或いは識る者有りて云う、これ卽ち秦始皇帝山を驅るの鐸なり」とある。駆山鐸は物語の中では実際には出てきはしないのだが、非常に大きな役割を担っている。ヒッチコックのいわゆる「マクガフィン」（MacGuffin）のようなもので、それ自体は重要ではないが、主人公はその正体を突き止めようとして、危険をかえりみずひたすら突き進むのである。詳しくは、ヒッチコック・トリュフォー著『映画術』晶文社刊125頁、『飈風』四十二号所収の「西遊補私記（一）」を参照のこと。

第三回

桃花の鉞（まさかり）　詔もて玄奘に頒（たま）わり

鑿天の斧　心猿を驚動（おどろか）す

［詔勅を下して玄奘三蔵に桃花の鉞を賜り

天を鑿つ斧は悟空を驚かせる］

悟空は宮中の奏楽を耳にして、すぐに虎門[1]の中へ飛んで入り、重なり合った建物を通り過ぎ、青い彫刻を施した軒にやって来た。と、大臣たちがまわりをぐるりととり囲み、まん中に天子が坐っている。

しばらくして、ふと見れば天子が突然真っ青になり、臣下に、「朕は昨日『皇唐宝訓』[2]を読んでいたが、中にこんな一節があった、「唐僧の陳玄奘、妄りに緇子を以て我が先王を惑わす。門生弟子は、盡く是れ水簾石澗の流れにして、錫杖檀盂は變じて木柄金箍の具と爲す。四十年後、其の徒衆を率いて、我が疆土を犯す、此れ大敵なり。」［唐の和尚陳玄奘は、僧の分際で吾が先代の帝を惑わした。彼の弟子はすべて水簾洞・流沙河の連中で、錫杖や托鉢はくまでや金棒などの武器に変えてしまった。四十年後にその手下を率いて吾が領土を侵略しようとしている、これは大敵である。］

また別の一節にはこうあった、「五百年前に、孫悟空なる者有り、曾て天宮に反（はんこう）し、玉帝を提（とら）えてこれを階下に坐せしめんと欲す。天命未だ絶えずして、仏祖これを鎮む。天すら且つかくの如くなるに、而かも況や人においてをや。然るに唐僧納めて第一の徒弟と爲せしは何ぞや。西方の遊を以って、東南に覇を肇め、猿馬の威に倚り、鯨鯢の勢い[3]を壮んにせんと欲するなり。」［五百年前に、孫悟空というのがいた。かつて天宮に反抗して玉帝をひっつかまえて階下にひきすえようとした。天命は絶たれず、お釈迦様が孫悟空を鎮圧した。天でさえも手を焼いたのだから、まして人間など彼をどうすることもできない。であるのに、玄奘が彼を一番弟子にしたのはなぜか？西方に取経に行くというのを隠れ蓑にして東南に覇業を称えはじめ、猿や馬の威勢

1　皇帝の政務庁の門で、虎が描かれていた。『周禮』地官師氏に「虎門の左に居りて王の朝を司る」とあり、鄭玄の注は「虎門は路寝（正殿）の門なり。王は日びに朝を路寝に視る。門外に虎を畫く」と言っている。

2　架空の書物である。

3　鯨鯢の勢い　『春秋左氏伝』宣公十二年に、「古（いにし）えには明王不敬を伐ち、其の鯨鯢を取りてこれを封じ以て大戮と爲す」とあり、その杜預注は「鯨鯢は大魚の名なり、以て不義の人の小國を呑食するに喩う」と言っている。

を借りて小国を併呑しようとしているのだ。］

朕はこの書物を読んで、いささか恐ろしくなってきた。そこで総大将の趙成を西の方へ派遣、唐僧三蔵の首を取って来させ、ほかの弟子たちをただちに赦免、解散させれば、それで事は収まるだろう」

尚書僕射[4]の李曠が大臣の列から進み出て奏上、

「禿臣の陳玄奘は、殺してはなりません。活用しなくてはなりません。自分で自分を殺させるべきで、他人を使って彼を殺させるべきではありません」

奏上が終わると、新天子は将兵に命じて武器庫から飛蛟の剣、呉王の刀[5]、碣石の鉤、雷花の戟、五雲宝彫の戈、烏馬の冑、銀魚の甲、飛虎玉帳の幡、堯舜の大旗、桃花の鉞、九月の斧、琉璃月鏡の盈、飛魚紅金の袍、斬魔晶線の履、七星の扇を取り出して来させ、それといっしょに一枚の黄色い絹の詔書を封じ、西天殺青掛印大将軍[6]御弟陳玄奘に急送させた。

殺青将軍の四文字にご注意。

詔に曰く、

大將軍は碧節[7]のごとき情、朱絲のごとき直[8]。昨、青路[9]の諸侯、馬を宗國[10]に走らせ、競って將軍の雄武を奏す。西方の天下をして、人魚も舌を結び、而して海蜃も氣を無わしめ、草階[11]も華暦の代も、その人を見ること闕し、と。朕は素より慕い、詞の美良なるを聴くも、目を西山に轉ずれば悲しきかな嘆ぜり。

今夫の西の賊は星の如く亟り、關檄は日に來る。蓋し天は別離を厭い、

4　宰相にあたる。

5　呉王の刀　刀ではなく劍ならば、『史記』巻六十六伍子胥列傳で、呉王夫差が伍子胥を疎んじて死を賜う場面に、「乃ち使いをして伍子胥に屬鏤の劍を賜わしむ」とある。

6　殺青は悟空の情を殺すという意味を含み、掛印は元帥に任命することを意味する。

7　碧節　杜甫「南岳を過ぎて洞庭に入る」詩に「翠牙　裛檗を穿ち、碧節　寒蒲を吐く」とあり、蒲の「碧の節」のように清廉だと述べている。

8　朱竹の直　杜甫「韋諷の閬州録事參軍に上るを送る」詩に「操持す紀綱の地、喜びて見る朱絲の直なるを。」とあり、注６の「碧節」と並んで杜甫の詩を襲っているのは明らかである。

9　青路　天子の御成り道を言う。『芸文類聚』巻六十四居處宅舍に引く梁劉孝儀「爲武陵王謝賜第啓」に、「右に御溝を帯び、左に青路廻る」とある。

10　宗國　『春秋左氏傳』哀公八年に、「且つ夫れ人の行くや、悪む所を以って郷を廢さず、今子は小惡を以って宗國を覆えさんとす、亦た難からざらんや」とあり、祖国ひいては朝廷を指す。

11　草階　『十八史略』に「茆茨剪らず、土階三等、草有り庭に生ず」とあり、「草階」は帝堯の時代、古代を指す。

飛錫[12]よりの歸期なり。將軍何ぞ素池より躍りいでて慧の劍[13]を彈き、墨　緇を褫ぎて智囊[14]を傾け、綠林[15]を練の如くたいらげ、玄日のもと　烽　無からしめざるや。然る後、朕は一尺の素[16]を以って將軍の馬首に束がん。この日の雕戈と銀甲は他時の蟲帳蛟圖とならん。

若乃、崑崙の銅柱[17]には墮淚の碑文[18]を刊み難く、天壁の金繩[19]には誰か歸來の辭句を賦しえん。

惟だ、大將軍は一にこれを思い、二にこれを思え。且つ夫れ朕が珊瑚の弓・碧玉の矢に厭くこと久し。

［大将軍は蒲の緑の節のような心をもち、赤い琴糸のように剛直である。昨日、都大路において、諸侯は馬を朝廷に向って走らせ、競って将軍の雄武を上奏した。「西方の国々では、人魚も黙り、蜃気楼も形を失い、素朴な古代においても、華麗な御世においても、これだけの人物を目にしたことがありません」と。朕はしばしばそなたのよい評判を耳にしてい

12　飛錫　『文選』巻十一所収孫綽「遊天台山賦」に「王喬は鶴に控りて以て天に沖い、應真は錫を飛ばして以て虛を躡む」とあり、唐代の冷朝陽「張深秀才と同に華嚴寺に游ぶ」詩に、「僧有り錫を飛ばして到り、客を留めて松間に話す」と併せて考えると僧の諸国遍歴を言うことは明らかである。

13　慧の劍　「慧劍」は一切の煩悩を断ち切る智慧の劍。『維摩経』下菩薩行品第十一に、「智慧の劍を以って煩悩の賊を破る」とある。

14　智囊　智慧袋、聡明で弁舌爽やかな人物を指す。『史記』巻一百一鼂錯傳に「〔鼂錯は〕其の辯を以て太子に幸さるるを得たり、太子家號して智囊という」とある。

15　綠林　前漢末、湖北省の綠林に王莽政権に反対する王匡らが結集し、反乱を起こした。『漢書』巻九十九下王莽伝傳下に、「是の時、南郡の張覇、江夏の羊牧・王匡らは雲杜綠林に起ち、號して下江の兵と曰う、衆皆萬餘人」とある。後に山林沼沢に隠れ住む反政府勢力を「綠林」の名で呼ぶようになった。「練」は絹織物で、「練の如くする」とは反乱を平定することを言う。

16　一尺の素　文字通りには一尺の絹布、普通は手紙をさす。『文選』巻二十七「飲馬長城窟行」に、「客遠方從り來たり、我に雙つの鯉魚を遺る。兒を呼びて鯉を烹るに、中に尺素の書有り」とある。

17　崑崙の銅柱　この世のものでない柱。『神異經』に、「崑崙の山に銅柱有り、其の高さは天の如く、天柱と爲す可きなり」とある（原本『説郛』巻六十五）。

18　墮淚の碑文　晋の征南大將軍羊祜は人格者として知られ、敵国の呉の人々からも慕われた。人々は彼の名前を呼ばず、「羊公」と呼んでいた。彼がなくなった時、襄陽の人々は彼のために碑を建て皆の碑を見て泣いたという。「襄陽の百姓は峴山の祜の平生游憩せし所に碑を建て廟を立て、歳時に饗祭す。其の碑を望む者流涕せざる無く、杜預因りて名づけて墮淚の碑と爲す」（『晉書』巻三十四羊祜傳）

19　天壁の金繩　「天壁」は天にもとどく崖、宋之問の「初至崖口」詩に、「崖口　衆山斷たれ、嶔崟　天壁聳ゆ」とある。ここではおそらく泰山を指す。また「金繩」は泰山を祭る祭文を記した書札をつなぐ黄金のひもを意味する。『隋書』巻七禮儀志二に、「漢の武帝頗る方士の言を採り、玉牒を造爲り、編むに金繩を以てす」とある。

たが、目を西山に転ずると、悲しくてため息が出る。

今西方の賊軍は、降る星の如く来襲し、戦況が毎日とどいている。天は将軍の別離をいやがっており、そなたも諸国修行からお帰りになる時がやって来た。将軍よ、素池から躍り出て智慧の剣をたたき、墨染めの袈裟を脱いで智嚢を傾け、緑林の反乱軍をなめらかな絹織物のように平定し、太陽の光の下、戦火を告げる烽火が上がらぬようにさせなさい。その後で朕は一尺の手紙を将軍の馬首にまきつけよう。今日の戈や甲冑は他日のインテリアと化すだろう。

さて、崑崙山の銅柱には羊祜の死を悼んで誰もが涙したような墮涙の碑文を刻むことはできないし、泰山を祭る書札をつなぐ黄金の紐には帰去来の辞句を書き付けることはできない。

大将軍よ、ひたすら朕の提案を真剣に考えよ。朕はもう弓矢をとっての戦にあきあきしたのだ。〕

宮中から瓏琥の割符[20]を持って来させ、詔書といっしょに使者にわたした。使者は聖旨を受け取ると、龍虎の割符を持ち、天子の印璽を押した詔書を捧げ、馬を飛ばして城を出たのであった。

悟空は大変びっくりしたが、ここでもめ事を起こして、お師匠様に迷惑をかけるのが恐ろしく、声も立てられず、すぐに使者を追っかけ、「梅花落」を一曲舞いつつ城門を出て、もとの姿を現わし、使者の方を眺めたが、使者はとっくに見えなくなっていた。悟空は苦悶の余りしばらくの間昏倒してしまった。

さて悟空、新唐の真偽も弁別できない矢先、突然お師匠様が将軍にさせられそうになっているのを見て、驚くやらたまげるやら、憂えるやら悶えるやら、ガバと跳ね起き、お師匠様の行方を捜しに出かけた。

と、突如天上で人が話しているのが聞こえてきた。あわてて上を見ると、四五百人が斧やまさかりを手に持ち、刀をグルグル振り廻し、みんなで天に穴を開けているところだった。

悟空は内心思った、「彼らは当直の守護神の顔付きじゃないし、悪星や凶星

20　龍虎の割符　原文は「瓏琥節」、使者が身分を証明するために持参した龍虎の形をした判物である。『周禮』地官掌節に、「凡そ邦國の使節は、山國は虎節を用い、土國は人節を用い、澤國は龍節を用う」とある。「瓏琥」のように玉偏をつけているのは、玉を龍や虎の形に加工した判物を意味しているからである。

でもない、明らかに下界の凡人だ。なんでここでこんな事をやってるんだ？
妖怪変化が人をたぶらかしているにしちゃ、その顔に邪気がない」
　考えてみると、

奇文

「天に疥癬が出て、人に背中を掻かせようというのか？
天に余分な骨が出来たので、外科の先生を呼んで削り取ってもらってるのか？
天が古くなったのが嫌になり、古い天をえぐり取って新しい天に代えようというのか？

ニセ天・本物の天の句は微妙。

それとも天に垂れ幕が出来たので、垂れ幕のようなニセ天をこそげ落とし、本物の天に代えようというのか？
天の川からあふれた水をここから下へ抜こうというのか？
それとも霊霄殿の再建てことで、今日は大安吉日、着工したのか？
それとも天はいなせ好みで彫り物いっぱい人にさせ、倶梨伽羅紋々になろうとしているのか。
それとも天帝が俗界に憧れ、御成り道一本開通させて、しょっちゅう降りてこようというのか？
天の血は赤いのか白いのか？
天の皮は一枚かそれとも二枚か？
天の胸を解剖したら、天に心が有るのか無いのかわかるだろうか？
天の心は偏っているのか、正（まっす）ぐなのか。
天は柔らかいのか、それとも天は硬いのか？
天は雄なのか、それとも雌なのか？
天の山を掘り返して逆にぶら下げ、地上の山と高さ比べをしようとしているのか？
天の口を開鑿して人間世界を呑み込んでしまおうというのか？
　たとえそうでも下界の凡人がそんな力を持っているはずもない。おれが行ってちょっと聞いてみればはっきりすることだ」
　悟空はすぐに大声で呼びかけた、「鑿天の棟梁、あんたはどこの国王の部下で、なぜこんな不思議なことをなさる？」
　彼らはみんな刀や斧を置いて、空中でお辞儀をして言った、
「東南からいらっしゃった和尚様に申し上げます。われわれの仲間は踏空児と言い、金鯉村に住んでいます。二十年前、あるさすらいの道士に踏空法を

伝授され、村の男女がみな御札を描き呪文を唱え、雲の乗り物を飛ばせるようになりました。というわけで金鯉村を踏空村と改称、生まれた子どもたちをみな踏空児と呼び、ありとあらゆる空を踏むことになりました。

ところが、当地には青青世界天王、別号小月王というのがおりまして、近頃西天に仏典を取りに行く和尚を一人迎えましたが、それがなんと地獄の賓客、天宮の逆賊、斉天大聖、水簾洞主である孫悟空行者の二番目の師匠[21]で、大唐の正統な皇帝から百宝の袈裟と五花の錫杖を賜り、御弟の称号も賜った唐僧、玄奘大法師だったのです。この法師の俗姓は陳、なるほど清浄で謹直、生臭を食べず、酒も飲まず、人の目を盗んで女性と関係せず、西天にはきっと行けるでしょう。しかし、孫行者は、はばかることなく無茶のし放題、草を刈るように人を殺し、西方一帯は赤い血の飛び散る道に変わりました。人々がその話題となると、誰もがみな切歯扼腕するのでした。

ここに大慈国王という方がいて、衆生をとても憐れみ、とうとう西天への大道に、天にもとどく青銅の壁を鋳造、道は完全に遮断されました。さらに孫悟空が長短様々に変化できるということなので、天にとどく青銅の壁のあたりに、六万里にわたる相思網を一枚張り巡らしました。今東天と西天ははっきりと二つに分かれ、舟も車も水上も陸上も、何一つとして通れる術がありません。

三蔵は大泣き、悟空は足がブルブル震えて、逃げ出しました。八戒は三蔵の二番弟子、沙悟浄は三番弟子ですが、ひたすら泣きわめくばかり。三蔵乗用の馬は草を一口も食べません。その時三蔵は混乱の中である事を思いつきました。そこで、

そら、話を持ち出して来た。

「二番弟子よ、あわてるな。三番弟子よ、あわてるな」

と言うやいなや、ただちに白馬に一鞭あて、青青世界に走り込みます。

小月王は三蔵を一目見るなり、前世の因縁でしょうか、たちまち一心同体のように打ち解け、青青世界をあの和尚に譲ると言ってやみませんし、あの和尚はまったく受けようとせず、ひたすら西天へ上ろうとします。小月王は押し付け、和尚は押し戻し、押し付けたり押し戻したり、数日が経ちました。小月王は万策尽きて、国中の賢者を招集、いっしょに合議しました。その中の賢者の一人がある計略を思いついたのです。

21　悟空の最初の師匠は須菩提祖師。『記』一回。

「鑿天の人［天を掘鑿できる人］をあちこち尋ね歩き、天が掘鑿されたら陳先生にピョンと飛び上がってもらい、まっすぐ玉皇殿で手形を交付してもらい、そのまま西天へ到達、これが最高の計略です」

小月王は喜び悲しみ相半ばし、即座に騎馬隊を召集し、あらゆる場所で鑿天の人を捜索させたところ、ちょうど我われが空中で雁を捕らえているところに出くわし、騎馬隊が一団となって押しかけ、金の鎧を着た将軍がむやみやたらに突っついたり触ったりしながら言いました、

「これこそ鑿天の人だ、これこそ鑿天の人だ」

小月王は鑿天の人を見て大喜び、早速彼らを巻き込んだ。

一隊の兵卒がわたしらを取り囲み、一人一人捕らえては、首かせをはめ、鎖につないで小月王のところへ送ります。小月王は大いに喜び、部下に命じて首かせを取り、鎖をはずさせ、ただちに褒美の酒を出させ、わたしらに振る舞い、天を掘鑿するように迫りました。

ことわざに、「玄人はあわてない、あわてるのは玄人じゃない」[22]とあります。

わたしらは他の事はやったことがありますが、鑿天の斧だけは使い慣れていません。今日は小月王に、こんな接待を受けたので、仕方なく刀や斧を切れ味よく研ぎ、無理やり鑿天のまね事をしてみましたが、長い間上を向いていると首が痛くなり、長い間踏空して足が疲れました。

昼ごろでしたか、わたしたらがみんなで力を合わせて一掘りすると、天にちょっとすき間が開き、なんと掘り損なってガラガラガラッとばかり、霊霄殿の床に穴を開け、霊霄殿をツルリッところがり落としてしまいました。天では「天を盗んだ泥棒をつかまえろ」と怒鳴り声がとびかい、上を下への大騒ぎ、長い事してやっと収まりましたが、わたしたは星回りがよく、自分たちがしたことなのに、他人が罪をかぶってくれたのです。

天界で叫び声が止み、わたしらも少し心配だったので、聞き耳立てていますと、太上老君[23]と呼ばれる人物が玉帝にこう言うのが聞こえてきました、

「怒ってはなりません、あわててはなりません。これは決して別人の仕業にあらず。孫悟空弼馬温のろくでなしの悪ガキがやったことにまちがいなし。

22　原文は「會家不忙」。『記』四回に、「那猴王正是會家不忙、將金箍棒應手相迎」（サルの王はまさに玄人はあわてないというやつで、金箍棒を取り出して迎え撃った）とある。

23　道教では老子を極めて尊んだ。「太上老君」はその尊称のひとつ。

ただちに天兵を出動させたら、またもや大事件になるかもしれません。まず御仏にお願いし、やつを五行山の下に押さえ込み、二度とあやつをこの世に出してはなりません、と御仏に申し上げておく必要があります。」

大聖に向かって大聖の話をし、大聖に向かって大聖に同情し、大聖に向かって大聖を罵っている。この時大聖に入る穴があったのかしらん。

わたしらはそれを聞き、罪を免れたとわかり、考えてみると、とにかく他人が罪を背負ってくれたので、またここへやって来て、勇気を奮って穴を開けています。まさか天から二つ目の霊霄殿がころがり落ちて来ることはないでしょう。ただ可哀そうなのは孫悟空、下界の西方への道筋ではまだやつを憎み、天界でもやつを憎み、御仏のところにはまたやつにかこつけて一騒ぎ起こす者がいて、観音菩薩も御仏がやつをとがめるのを見ては、決して暖かい眼を向けようとはしないでしょう。やつは一体どこへ行くんだろう」

そばの一人が言った、

「チェッ！エテ公の孫悟空め、何が可哀そうだ！もしこのエテ公のろくでなしがいなければ、わたしらがどうしてここで苦労するものか」

斧を持ちまさかり振り廻す人々は、みなわめきたて、

「そうだ、さあ罵ってやれ」

ひたすら聞こえるのは空中の大騒ぎ、「弼馬温」「酒泥棒」「薬泥棒」「人参果泥棒」「強盗やくざ」「サルの妖怪」などと、一人一言わめきだし、孫悟空の金色の目はかすみ、銅の骨はグニャグニャになった。

（評）この書物のすごいところは、一方で事件を解決、一方で事件の伏線を張っているところだ。この回では第二回の事件を解決しながら、一方で小月王の青青世界を提示し、伏線を張っているのだ。

第四回

一竇開きし時　万鏡に迷い
物の形現るる処　本の形亡(うし)なわる
［穴が開いて悟空は万鏡楼に迷い込み
物の形が現れる時に本体の形は失われる］

さて悟空はこのような言われ無き誹謗を受け、ひどく罵声を浴びせられたために、怒りが何度もこみ上げ、すぐに一戦交えようとしたが、またこう思い直したのだった、

「おれが来た時、お師匠様はちゃんと草むらに坐っておられた。どうして青青世界なんかにいるものか。この小月王は絶対に妖怪だ、こいつはまちがいない」

男の中の男の悟空がとうとう言い返しもせず、ひたすら前へ跳びだしていった。角を曲がったところで、出会いがしらに一つの城壁に突き当たった。城門の扁額に碧の苔が自然に篆書のような文字を形作り、それはなんと「青青世界」の四文字で、二枚の扉が半分開いていた。悟空は大喜びで、急いで歩みよると、城門に沿ってさらに高い城壁が聳え立ち、悟空は東から西へ駆け、西から東へ駆けたが、入り込む穴一つなかった。

ここまで来てやっと「青青世界」のありかが分かった。

悟空は笑いながら、

「こんな城にまさか人っ子一人いないはずがない。人がいないなら何で城壁を作るんだ？おれがしっかり調べてやろう」

しばらくの間調べたが本当に入り口がない！彼はまた腹が立ってきて、東へ西へとぶつかり、上へ下へとぶつかりしていると、青い石の表面がポッカリ割れ、突然つまずいてまばゆいばかりに光輝く場所に転落した。

悟空が瞳を凝らして眺めると、なんとそれは琉璃(がらす)の楼閣[1]で、上は琉璃の大きな一枚板で屋根を作り[2]、下も琉璃の一枚板で床を張り、紫琉璃の寝椅子が一つ、緑琉璃の椅子が十脚、白琉璃の卓子(てーぶる)が一脚、卓上に黒琉璃の茶壺(きゅうす)が一つ、ヒスイ色の琉璃の酒杯が二つ、正面の青琉璃の窓は八枚ともすべて閉まっていて、自分がどこから入って来たのかまったくわからない。悟空はずっと驚

1　琉璃の楼閣　「琉璃」はガラスの古称。すべてガラス張りの建物など、十七世紀のどこにも存在しなかった。西欧では一八五一年ロンドン博覧会で展示された鉄骨ガラス張りの「水晶宮」があり、中国では注三に引く乾隆時代の北京に出現したパビリオンの例がある。

き怪しんでいたが、ふと頭をもたげて見ると、まわりはすべてびっしりと貴重な鏡で組み上げられ[3]、およそ百万はあった。鏡の大きさや形はバラバラで、円や四角やいろいろ、一つ一つ数え上げることは出来ないほど。ざっと概略を述べてみよう。

天皇獣紐鏡　白玉心鏡　自疑鏡　花鏡　風鏡　雌雄二鏡　紫錦荷花鏡　水鏡　氷台鏡　鉄面芙蓉鏡　我鏡　人鏡　月鏡　海南鏡　漢武悲夫人鏡[4]　青鎖鏡　静鏡　無有鏡　秦李斯銅篆鏡[5]　鸚鵡鏡　不語鏡　留容鏡　軒轅正妃鏡　一笑鏡　枕鏡　不留景鏡　飛鏡

悟空は言った、「これは面白い。おれさまの百千万億面相を映してみよう」

近づいて映してみると、自分の姿はなく、どの鏡の中にも別々の天地・日月・山林がみえるだけ。悟空は心の中で賞賛しながら、帯草看法[6]を使って一目で見尽くした。すると、耳元で「孫和尚、ずいぶんごぶさたしていたがお変わりないか？」と大声で呼びかけるのが聞こえてきた。

2　上は琉璃の大きな一枚板で屋根を作り　以下室内の調度のすべてが琉璃で出来ている、という記述が続くが、これは『補』第十三回に登場する緑竹洞（室内のすべてが竹で作られている）と同様の発想である。また董説が見た夢の記録の中にも、すべてが石造りの建物が出てくる。「近頃苕溪を旅行していた折に、次のような夢を見た。雨の中竹藪を突っ切るうちに、突如として門のように立つ二つの山に会った。わたしはその門から入って松並木を十里行ったところで、石造りの楼閣に登った。楼閣の中の卓子・椅子・窓・扉などすべて石造りだった。楼閣の上には石造りの扁額が有り、鳳凰が飛翔する字体で、碧緑色の篆書七文字「七十二峰曉寒生」が書かれていた。今わたしは何をする時にも「曉寒」から心が離れない」（「志園記」）このような幻想が董説を深くとらえていたことはまちがいない。

3　まわりはすべてびっしりと貴重な鏡で組み上げられ　はるか後代だが、乾隆十六年（1751）、皇太后の還暦祝いの折に、京官・地方官が雲集、北京の西華門から西直門にかけてきらびやかな芝居小屋がしつらえられ、各地の地方劇が数多くかけられ、また各省が腕によりをかけて作り上げた大小の展示館が人々の目を引いた。「廣東の搆うる所の翡翠亭の如きに至りては廣さ二、三丈、全て孔雀の尾を以って屋瓦を作り、一亭でただ萬眼のみならざるなり。楚（こほく）省の黄鶴樓は重簷（のき）三層、牆壁（かべ）は皆玻璃（ガラス）の高さ七、八丈なる者を用う。浙（せっこう）省は湖鏡を出す。則ち廣き榭を作り、中に大圓鏡を以って藻井（てんじょう）の上に嵌め、四旁は則ち小鏡数萬、鱗（うろこ）のごとく砌（つみ）あげて牆（かべ）を成す。人一たび其の中に入らば、即ちに一身は千百億身に化し、左慈の處として在らざる無きが如し、真に天下の奇観なり」（趙翼『簷曝雑記』巻一慶典）万鏡楼はここに具現したのである。

4　漢武悲夫人鏡　漢の武帝が李夫人の死を悲しみ、方士を使ってその魂を呼び寄せようとした故事を踏まえる。『漢書』巻九十七上外戚傳に、「上李夫人を思念して已まず、方士齊人少翁、能く其の神を致すと言う。乃ち夜燈燭を張り、帷帳を設け、酒肉を陳べ、上をして他の帳に居らしめ、遥かに望むに好女の李夫人の貌の如きの、還た幄に坐し歩むを見る」とある。

5　秦李斯銅篆鏡　秦の始皇帝の宰相李斯が小篆の字体を創始した故事を踏まえる。

6　「帯草字」という語彙があり、草書体のようなぞんざいな字を意味する。そこから推測してざっと見ることを指すと考える。

悟空は左右を振り返ったが、誰一人おらず、楼上には幽霊の気配もなく、その声を聞くにつけてもほかから出ているわけではない。あれこれとまどっているその時、突然一枚の獣紐紋様の四角い鏡の中で、一人の男が手に鋼の叉を持ち、鏡の表面にぴったりくっついて立ち、またもや大声で、

「孫和尚、驚かなくてもいい、昔なじみだから」と呼びかけてきた。

悟空は近づいて行ってちょっと見て、

「顔に見覚えはあるが、すぐには思い出せない」

その男がまた言った、

「わたしは姓が劉、名が伯欽[7]、昔五行山麓からおまえさんが出て来た時、わたしも一肌脱がせてもらったが、すっかりお忘れとは、人情なんてそんなものさ」

悟空はあわてて深々と頭を下げ、

「まことに申し訳ない。恩人の親分、今どんな仕事をしていなさる。なんでまたおれと同じくここにいる」

「同じなんてとんでもない。おまえさんは他人の世界にいて、わたしはおまえさんの世界にいる。同じじゃない、同じじゃない」

「同じじゃないなら、どうして顔を合わせられる？」

そら、話を持ち出して来た。

「あんたは知らんだろうが、小月王が万鏡楼台を建て、鏡一枚で世界一つを管理し、草木の一本一本、万物の動静のすべてが、鏡の中に閉じ込められていて、心のままに見て行くと、何でも出てくる。というわけで、この楼は名づけて三千大千世界[8]と呼ぶんだ」

そら、話を持ち出して来た。

悟空はふと考えを変え、唐の天子の消息を彼に尋ねて、新唐の真偽を見分けようとしていたその矢先、突如として森の暗闇[9]からばあさんが一人出て来て、とんぼ返りを二、三度うって、劉伯欽を追い立て、二度と出て来なくなった。

7　五行山の猟師で、三蔵の危難を救い、五行山に閉じ込められていた悟空を救出する手助けをした人物。『記』十四回。

8　三千大千世界　須弥山を中心に、鉄囲山を外線とし、それを一小世界とする。千の小世界を合わせたのが小千世界、千の小千世界を合わせたのが中千世界、千の中千世界を合わせたのが大千世界、総称して三千大千世界という（『智度論』七など）。一つの鏡が一つの世界を内包し、全体が無数の鏡によって組み上げられた万鏡楼を「三千大千世界」と名づけるのはきわめて妥当である。

9　原文は「黒林」。用例としては宋代蔡襄「圓山廟」詩に、「絶頂の黒林長く雨を帯び、曲崖の飛磴塵を留めず」とある。

悟空はがっかりして後ずさりし、あたりがすでに夜の気配になったのを見て、

「もう暗くなりかけているのに、まだお師匠様を見つけられない。鏡をいくつかじっくり観察して、それからまた取り組もう」

すぐに天字第一号[10]から見始めた。見れば鏡の中で一人が科挙の合格者掲示板を出している。掲示板には第一名の廷対秀才[11]柳春、第二名廷対秀才烏有[12]、第三名廷対秀才高未明[13]と書かれている。

これほどの情景描写は、一幅の「落第図」どころでなく、唐の柳真生も取るに足らない。

あっという間に千人万人が押し合いへし合い、ワイワイガヤガヤ、一斉に掲示板を見に来た。最初はただ騒がしいだけだったが、次いで号泣の声、次いで怒り罵りの声がし、しばらくして一群の人々がそれぞれ散って行った。その中には、石の上にぼんやりと坐っているもの、鴛鴦瓦の硯を地面にぶつけて砕くもの、頭髪ボウボウで父母・恩師・先輩に追いたてられるもの、手箱を開き玉琴を取り出して焼き、しばらくの間大泣きするもの、枕元の剣を抜き放ち、自殺しようとして剣を女に奪い取られるもの、下を向いてボンヤリと考え込み、自分の殿試の答案を三度も繰り返し読み上げるもの、大笑いしながら机を叩き、「命（さだめ）だ！命（さだめ）だ！命（さだめ）だ！」と叫ぶもの、頭を垂れて真っ赤な血を吐くもの、先輩が何人か酒食代[14]を出し憂さ晴らしをしてやろうというもの、一人で詩を吟じていたと思ったら突如一句を吟じ、足でやたらに石を蹴飛ばすもの、下僕が「掲示板に名前がありません」と報告するのを許さないもの、外見は憂鬱そう、こっそり笑みをもらし、合格したぞと言わんばかりのもの、本当に悲しみ本当に怒っているのに、無理に嬉しそうな顔を作っているものなどがいる。

ところが、合格掲示板に名前があった連中ときたら、あるいは新品の衣裳・

10　天字第一号　文字通りには「いの一番」であるが、科挙の試験が行われる貢院の房舎が『千字文』（「天地玄黄、宇宙洪荒」に始まる童蒙教科書）の順に並べられていることのからの連想も働いている。

11　天字第一号　文字通りには「いの一番」であるが、科挙の試験が行われる貢院の房舎が『千字文』（「天地玄黄、宇宙洪荒」に始まる童蒙教科書）の順に並べられていることのからの連想も働いている。

12　「烏（いづく）にか有る」すなわち「どこにも存在しない」氏名で、この合格発表が幻想たることを暗示している。司馬相如の「子虚賦」にも架空の人物「烏有先生」が登場する。

13　高未明　「未だ明らかならず」と訓読され、「烏有」と同じ意味合い。

14　酒食代　原文は「買春錢」。馮贄『雲仙雑記』巻二に引く『承平舊纂』に、「進士に第（きゅうだい）せざる者に、親知（しんゆう）は酒肉の費（ひよう）を供す、買春錢と号（い）う」とあるのに基づく。

靴に着替え、あるいはむりやり笑いを抑えた表情を作り、あるいは壁に詩文を書きつけ、あるいは自分の答案を見て千回も読み、懐にしまって立ち去り、あるいは他人に代わって嘆いてみせたり、あるいは試験官に眼が無かったとわざと言ってみたり、あるいは他人にむりやり掲示板を見させ、たのまれた他人は見たくもないのに耐え忍んで見終わったり、あるいは談論風発したあげく、今年の試験はとても公平だったと言い、あるいは除夜の夢見がよかったと問わず語り、あるいは今度の答案はあまりうまく書けなかったと言う。

いくらも経たないうちに、早くも誰かが第一位の答案を写し、居酒屋で頭を左右に振りながら朗誦している。側にいた若者が尋ねた、

「この文章はなぜ短いんですか？」

その文章を朗誦していた人が言う、

「本来の文章は長いんだけれど、わたしはその中の良い文句だけ選んで写してきたんだ。さあさあ、早いところいっしょに読んで、作り方を勉強しろ、そうすりゃ来年はまんまと合格さ」

二人は朗誦を始めた。その文に曰く、

「之」の多用がすばらしい。

振起する之絶業[15]、扶進する之人倫[16]。中を学ぶ之真景[17]、理を治する之完神。何となれば則ち、この境は已に混沌之追むべからざるが如く、この理は呼吸之去るべからざるが如し。故に性體[18]之精未だ洩れず、方策[19]之燼皆靈あり。これを總ぶるに、造化之元工[20]は槩してこれを中庸[21]以下に望むを得ず。而して鬼神之黙運[22]は、嘗に以ってこれを寸掬之微

15　絶業　『史記』司馬相如傳に、「衰世之陵遲を反し、周氏之絶業を繼ぐは乃ち天子之急務なり」とあり、なにやらここの答案のスタイルを連想させる。

16　人倫　『孟子』滕文公篇「人の道有るや、飽食煖衣、逸居して教え無ければ、則ち禽獣に近し。聖人は之を憂うる有り、契をして司徒爲らしめ、教うるに人倫を以てす」とある。

17　真景　道仏二道において、大悟を得る際に修行者が見る景象。『雲笈七籤』巻八十符圖、神仙真道混成圖上部第七真氣類に、「幽冥に真景生ず」とある。

18　性體　生まれながらの性格を指す。『舊唐書』巻三太宗紀下に、房玄齢・蕭瑀が隋の文帝を評した言葉に、「(隋の文帝は) 性體仁明に非ずと雖も、亦た勵精の主なり」とある。

19　方策　『中庸』二十章に、「哀公政を問う。子曰く、文武の政は布きて方策に在り」とあり、朱熹の集注に「方は版なり、策は簡なり」とある。歴史の記録を指す。

20　元工　「元工」の用例はないが、同音の「元功」は、『後漢書』馮衍傳上に、「まさに國家の大業を定め、天地の元功を成さしめんとす」とある。

21　中庸　『漢書』巻三十一項籍傳に、「(陳涉の) 材能は中庸に及ばず、仲尼墨翟の知、陶朱猗頓の富有るに非ず」とあり、平凡な才能を指す。

22　黙運　「黙運」の用例としては、唐順之の『荊川先生外集』巻一「謝賜銀幣表」に、「神功は黙かに運きかけ、醜類既に遁るると雖も、復た擒わる」とある。

に得る有り。

［中断された事業の再興、人道主義の推進。中庸の道を学ぶ者が見るヴィジョン、国家を統治する者が持つ完全無欠の心。なぜならば、この境地は捉えきれぬカオスのようなものだし、この理法は取り去れない呼吸のようなものだから。だから本性の精華は洩れたことはないし、史冊の燃えかすはなおも生命を維持している。総括すると、創造主の巨大な功績は、中庸以下の人材には理解できぬし、神霊たちの密やかな働きかけは、微妙なところに作用する］

この一節は天下の文士を大罵倒。

孫悟空はワハハと大笑い、

「おれさまは五百年前、八卦炉[23]の中で太上老君が玉史仙人に文章の気運[24]を話しているのを聞いた、

奇文。

「堯舜から孔子までは、純天運[25]で、大盛と称する。孟子から李斯までは、純地運で、中盛と称する。その後五百年は、水雷運に当たっていて、文章は気が短小で体は長大、小衰と称する。さらに八百年下って山水運まで来ると、もうだめだ、もうだめだ」

現代の文章、別号は「山水文」。

その時玉史仙人が尋ねた、

「どうだめなんです？」

「悲しいかな、一群の耳なし、目なし、舌なし、鼻なし、手なし、足なし、心なし、肺なし、骨なし、筋なし、血なし、気なしの人間を名づけて秀才と言う。「百年只だ用る一張の紙、棺に蓋すれば却と両句の書さえ無し」（一生の間ひたすら一枚の紙を弄んでいるが、死んでしまえば何一つ残らない）連中が作る文章は奇妙キテレツ、混沌[26]が死んで何万年も経つのに、彼を放っ

23　太上老君すなわち老子の八卦炉で、悟空が焼き殺されそうになったことがある。『記』七回。

24　文章の気運　原文は「文章氣數」。『朱子語類』巻九十四「周子之學通書」に、「國家の氣數盛衰も恁地」とあることから、文章の盛衰の意味となる。また『封神演義』第一回にも、女媧が紂王を罵る場面に、「我想成湯伐桀而王天下、享國六百餘年、氣數已盡。」（私が思うに、湯王が桀を討伐して天下に君臨し、六百年もの治世を享受したのだから、国の命数はとっくに尽き果てたのだ）とある。

25　純天運　純天運は『易経』で一番目の乾の卦、純地運は二番目の坤の卦、水雷運は三番目の屯の卦、山水運は四番目の蒙の卦をそれぞれ指し、乾は最善、坤は次善、屯は困難、蒙は愚鈍を示す。

26　混沌　伝説の帝王で、生まれた時には身体に七つの穴（目、耳、鼻、口）がなく、一日に穴が一つずつ生じ、七日目に死んだという。ここでは質朴な文学を比喩している。宋代張表臣の『珊瑚鈎詩話』（歴代詩話所収）巻一に、「篇章は含蓄天成を以て上と爲し、破碎雕鎪を下と爲す。楊大年の西崑體は、佳からざるに非ざるなり。而れども、斤を弄び斧を操ること太甚し、いわゆる七日にして混沌死するなり」とある。

とかず、堯舜が黄庭（こころのなか）[27]に安座しているのに、それでも引っ張り出そうとする。呼吸は清浄虚無のものなのに、それを大切に育てず、かえって掻き廻す。精神[28]は、一身の宝なのに、それを鎮静させず、かえって動揺させる。この文章を何と呼ぶと思う？実は紗帽文章[29]と呼ぶ。これを何句か作れたら、それがそいつの福運というもの、誰かが買い被ってくれ、追従言ってくれ、恐れ奉ってくれる」

老君が話し終えると、玉史仙人は涙ぐみながら立ち去った。思い起こせば、あの状元の文章はまさしく山水運に属している。こんなものに関わるのはやめて、天字第二号を見に行こう」とつぶやくのだった。

（評）悟空の新唐入りが第一層、青青世界入りが第二層、鏡に入るのが第三層。一層また一層と進むにつれ、一層また一層と危険が増す。

27　黄庭　道家の養生に関する経典『黄庭内景経』の略称であるとともに、身体内の脳中・心中・脾中を指す。『上清黄庭内景経』釋題に、「黄は中央の色なり、庭は四方の中なり。外に事を指しては即ち天中・人中・地中、内に事を指しては即ち脳中・心中・脾中、故に黄庭と曰う」（『雲笈七籤』巻十一）とある。

28　精神　心身をささえるエネルギー。

29　紗帽文章　こけおどし文体。「紗帽」は絹の帽子で、礼服の冠。